常山紀談

三四

13
561
2

門 イ13
帝 561
巻 2

常山紀談巻之三目次

一 中嶋元行が母備中紅山城をちる事
一 石川数正浅岡某と鞨の緒を結び縅を習ふ事
一 東照宮三河國一宮城御後巻の事
一 三好松永光源院義輝朝臣を弑せる事
一 三好実休戦死の事 附 光忠の刀の事
一 浦兵部功名の事
一 中村新兵衛永原安藝守一騎打の事
一 北條綱成地黄八幡の旗を捨る事
一 柴田勝家水缸を破て城を守る事
一 勝家先陣の殿となる事

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

一 坪内某料理の事
一 大沢左衛門が手の者ども 東照宮を窺ひ奉り事
一 清洲へ 東照宮信長公御對面の事
一 信長公伊勢を國司を亡し事
一 大久保忠隣功名の事
一 高木主水村越与三左衛門後殿の事
一 太田下野識鑒の事
一 北条丹後指物の事
一 浅井長政齋藤龍興と軍の事
一 九毛兵庫助軍配の事
一 馬場美濃守今河の館を焼く事
一 大友義鎮肥前國退口の事
一 信長公 東照宮小為朝の鏃を進らせられ事
一 姉川合戦の事
一 同榊原二の番功名の事
一 三井角右衛門生捕平右衛門功名穿鑿の事
一 金松弥五左衛門物見の事
一 信長公朝倉を撃ちし事
一 長野信濃守上野國箕輪城を守る事
一 箕形原合戦の事
一 同信玄遠謀の事
一 同 東照宮御退口の事

常山紀談巻之三

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀後ゟ兵一万をそへく備中
經山の城を攻させ〳〵此城ハ中鴻加賀ちゞ子大炊助元行ゞ
処なり元行僅ゟ二百計の兵をもちつゝと恐まゝ頓宮
次郎左衛門尉九郎二郎ゟ百姓ゞ二百人そへて寺屋敷と
いふ地ゟ伏おき阿弥左衛門三郎鷲尾五郎塚ハ鬼ケ城とゝ
ゟかゝ墨をゝり敵侮ゝ〳〵ゟ時内を冥く折て出相図
乃貝をふけバ鬼ケ城の伏兵後ゟまハり又頓宮ゟ百姓ゟ
帝旗を立さゝ竹鎗拔もゝせ関のあゝをあゞゝ尼子ゞ家
兵ゟ前後ゟ敵有ゝて助け合んとすゝでも道細く谷深く

なるまゝ落てみだれりされども攻具を設やうかゝみしに
元行が母物の具はよく羽折を忘刀を横くわえ女房二十人計
おもゝ元行本丸にある時八母出丸を巡り元行出丸を巡まば母
本丸をちりて士卒の怠を戒む或夜風雨甚しかりれば元行
百人計にて表討に出半をそゝ伏置さりかゝて乱まに入関
鬨声をあげ火をかけて静ふりく返るを敵追来まば伏
もよゝぬ往のかゝより伏兵どゝと起りて敵三百余打取
さり元行に防がれく尼子は軍引退て復攻る事なし
とかり
○東照宮今川氏真と怨不快の事起りて勇て後ひ罷侍
三郎君こゝをおもひ生害すべきよりゆゑ石川伯耆守

数正此由聞て いかゝせんと怨身の失ぎ出せりんと怨数正錯て
侍ふ人なゝん事にて口惜られしく数正罷向て冥途の供
にて参らめとて唯一人駿府にもなくかゝる知に今川家れ
侍大将朽屋が子二人生どゝれ氏真なるべきうふと家ゝ君の
怨外祖関口刑部大輔と相もり若君をせ出りんに八縁
殿が子ゝ君ゝ申ゝ氏を収てやがて若君を取
参らん数正肩ふの七十岡侍に帰るれば怨家人ハふるや及
ぶ國中此貴賤怨むひ参らつゝて慈ぜぬものこそな
くとゝ三方原合戦の時数正ハ信長に加勢とゝく遠州に
向ひくぶ武田ゝ参ゝと家ゝ取ゝて美濃の守獲土故
家にとゝふ浅岡の某弓矢をやりく怨るぬる兵と関え

しらば彼ぞ許さ行此度本國さ帰らるべ必ずうち死仕るべ
数正弓箭をゆり打物ふるくかるれとく軍さあつまり度を
なり拙ども軍さ陪むの日鞠は結むとてぞん掛故実ゆる事
と存りくいまぞ学ひいぞはれば死後さ鞠は緒ふけ骨法を
らざるとかるれ笑まれなんず義の上乃恥辱ふくれへば
教を奉ふ度ことて習ひ傳へ夜を日につぎて池下ア味方
示の軍まも対さそれて武勇をふるひうアを其後太閤小
敗まを囲ぶは城を出て上方さ登り豊臣家さ奉公して太閤和
泉をあるく武者奉行を命ぜられぬ数正徳川家累代の君
恩さ叛き一生の功アを武功を空しくして血氣既さ衰ふ所
を是を戒る事得さなるとこる聖人は言ふ所なるこそ

うつて出られ

○東照宮三河の一揆を鎮ろ城さ本多百助信俊を守アとおり勢
ふ永禄七年五月今川氏真二万餘の兵を以てかるれるを
其中八千騎引ふちく武田信虎を大将ふくく後巻の防さ
せられぬ　東照宮かくと召ぶうち立て一騎がけさ池む
ひ出アんとえるハ敵ハ味方さ比ぶまバ十倍もあんん
殊さ信虎ハ世ゆる更持ふと老臣ども諫まれとも其理ハ終
ぞふんはまでぞ人ハ出賤ふもふし信義の二つさとて
こて身を出つるなるひられ敵の城攻おるくアさ壊ふく
なバさもふんを既さ味方を入おきて今さ故大軍まれぞ
こて敗くべきや主の大事ハ従者が救ひ従者は危難ハ主の

生ながらハ弓矢とる道なり今ハ後詰よ打まけ屍を戦場よ暴
さるも運の窮めなるべしと仰せられバ是を聞く人々あはれ和り
き大将の御殿の御為よハいのちをすてん事なるべし計も
惜かりしいさみなきもむ其勢よ京て二千計の兵にてほづめ
よ打向ハせるひ信虎の八千まくひくなる敵にてハ迚
小城ぎハよ多つもよ城中にてひ悦ぶ事限なし氏真
ハ四方を取囲で一人もあるさで討とんと評定せる其
間よ　東照宮ハ百助を召具しひ城を出て引退き
百助今日ハ我ハ身よかけくらべむべくれくれ手の者四百俵
をもく信虎の軍よかけ合せ打破るく利を得り酒井左衛
門尉忠次石川伯耆ち数心牧野右馬允康成ハ後殿とする追
かるほどるるバ忽切くづをなき色あるハまてんえられど
氏真も進よ得ず　東照宮事れく帰陣せる給ひ
此年二歳ハ御ぱなり

○永禄八年三好義継松永久秀大和河内より京よ打入五月
十九日辰の刻先源院殿ハ館をかくみ乱ま入きれバ防ぐ者
ども或ハ討れ或ハ自害ま沼田上野ハ多と福阿弥とる者敬の
相ぞ竹ハ刺ぶを腰よ挿て外ようまぎれ入先源院殿の御
前よまゐりまれホ二人を始とくく防ぎ奮仕り之ぞ戦ハ
ん其間よ日比愛せる勢ま早足の御馬よ召まき東川原よか
けぬまセなるまぐ御運をひくるセ給ふべきま涙を流しやれバ
尤忠義の志非ぬ申つるまされども汝等討死まる給ま

残るなく手負ひて防戦ひ遂に自害する
其時八才
又月丸八歳なりしが名を付て書せ上て
自ら筆を把て書はしまひぬ光源院殿の弟鹿苑
寺の周嵩といふ者しが平田和泉守といふ者迎に遣し北山より
出さんを待て討たるに供せ十三四の童忽ちかの平田を
討たれば世は人なめらへて
是釋の義俊光源院殿を追善和歌は序を以て扶桑
拾葉集にはれども童の名をば信長記にて
世人は姓名を知せず小川の住人美濃屋小四郎にて容
貌世に優れしが供なりしが此変にあひて三条吉則の刀
を抽て和泉が首を打落しまもなくすむ者五六人切腹
して腹切て死せしなり

○三好修理大夫長慶八細川讃岐守持隆の臣なり三好八其先甲
斐の源氏小笠原の族小笠信濃の信州に住せしが三好長房は阿波
の守護なりしが世々阿波に住て京都に攻上り細川晴元に代り
て五畿内の事を執る第二は豊後守之長後実休と称す其弟安
宅摂津を冬康其弟十河一存なり天文二十一年実休持隆
を弑し其後室を以巳が妾なりし悪逆を恣にし永禄五年佐々
木義賀京に攻上りしが万松院殿八八幡に生て防ぎ畠
山尾張守高政佐々木義賀紀州より泉州に打出
より実休阿波より海を渡岸和田の東久米田に陣を久米田

寺小橘諸兄公の墓ヿり実休墓体堀石の掃をとり出し
人眉をひそめぞ〻いふるまひ三月五日高政兵をとりち先
陣を額ゞ示ふ〻ゝ実休山上より見おろし自ら先ゝ進
で高政ゞ先陣を打破る桧木山ゝ伏おきゝる政の兵ゝ根
来法師相加ゝ不意ゝ切てかゝり三木内匠一番槍を合せ実
休ゞ先陣敗北ゝ〻り実休ハ将机ゝ腰うけて引た者共と下知
し散〻ゝ我ひおゝ〻ゝ討まゝゝバ実休をバ根来左京おと
ゝ〻りを政大ゝ利を得河内ゝ〻ゝ入此時長芝ゞ籠り
飯盛の城をかゝみ攻る冬ゝ康兄の吊軍を志し且長慶を救
ん為ゝ岸和田を打出る政と蘇井寺ゝ南葉引陣ゝて冬あ
ゝ冬康勝利をえゝり実休討死ゝ刀ハ光忠ゞ作也信長光

忠ゞ刀を好二十五腰まで集られしゞ堺ゝて第一の好事木津屋
といふ〻商家ゝかの光忠の刀拭残らぬゝ世ゝ世中ゝ実休光忠や
有と問ゝふ一腰やり出て是なんと云信長行ゝて見ゝり
〻〻やと問ゝふ切先の少欠てハ実休打死の時根来左京を
刎られゝふ脇あてゝ突ゆりてかけゝゝ〻ゝ〻ゝ〻れハ伝也
よくゝゝりといはれしゝ
実休討死乃時長慶ハ飯盛ゝて連歌をゝ〻告来る○す
きゝまゝふ芦の一むらとり句人ゝ附ゝ〻ゝひゝゝふ丈
書を披てゝ〻ゝくをいそぎゝ〻ゝ〻ゝ古沢のあゝ紀ゝゝうゝゝと
なりてと附終て体て実休打死ゝ〻と告来まゝ今日の
連奇ゝゝて止へゝとてさて兵を出されゝゝとゝり

信長都ニ攻上ルヲ及て松永ハ降参ス三好長逸養嗣義継
ハ河内ニて自害ス三好の家滅亡せり
一説実休ハ泉州岸和田ニ安宅摂津守冬康ニちゝ
り畠山高政ハ紀伊國廣浦といへる所ニ流落の体なりしが
熊野根来寺ハ法師をかり催し岸和田へおしよする実休
後巻せんとて波濤ハ堺の津ニて勢揃せり高政家和田ハ
攻んとするを城の上ゆる山ニよりて城を見おろしたれ
四國の兵ハ篠原右京進長房一宮長門守成助ホ家和田の大
手ハ陣ス実休旗本ハ久米田ニ高政ハ陣を見て高政
ハ東をはしるく引退くと見えて遥ニ爰ニ来て討もらさんす
口惜紀ノ国なり山上へおりてみて一戦もあらばと下知
せしを按別高槻の城主入江左近大夫塩田采女ニ人京より
北使とゝ来ル居しが敵を小勢なりと見てたのもしひへど
今已の時なり高政軍配ハ味方の為ニハ大凶なり唯今か
らバ十ニ十敗ハ疑ひ移ル東北谷より二手ニ
あひもゝひ午の時ハ及て軍をすゝめる又敵を南山へそびき
出せら此二ツの間ニ見ハ実休心安られ時を過さバ敵ハ
利有べし切てかゝりもバ山を尾伝ひニ東へ下
ル左もくバ南へ下ル右ハ尾さへ引とゝべし入江塩田二手
ハ兵少なれバ篠原ハ城ハ入ん打つまて伏兵ハ多ゝ
高政夢ハ知ぬして東北の道ニ出なんと待ケて討ハ安か
ル高政ハ物見を出して見付るなどなるバ南の山ニ登り

横合より突かゝられより高政ハ篭中の鳥せとて二人の詞を用ひず
入江等東北の山ざハより進で行ふ実休ハ孫弟ぶ兵ともに
て高政を誘せゝふ長房いさゝかゝりて進みゆく上の山より
根来法師成田玄奇雑賀孫市より実休旗本僅より左へ
よりて切ゝかゝり猛攻を一時より決せゞ阿瀆淡の三國ハ
兵をひきゝ一多之方くハ引ゝ実休をうちかゝさバ
少もゝ我死せべしとゝバ孫市子細ゝや及ぶとて山を下り立
ち一文字より実休旗本より忽実休を鎗ゝ手あゞて
討とりゝ淀四ホハ敵をまてどんゝとゝ戦ハいゝとゝひ物見
をおもゝ実休討死を生ゝ知るさゝバ高政ハ陣より切て入討死
せゝてかけ向ひゝゝ猛小のゝゝ敵をかさより受塩田も討
死しゝれバ敵ゝ也でも堺をさとて敗北しゝりこれ永禄五年
壬戌三月五日久米田合戦より実休三十六歳なりとゝゝ
○毛利元就豊前門司の城ハかゝゝみを為て引返されし時大友宗麟
乃士大将瀧田民部ハ一弱波うち際より馳来る小早川隆景の士
浦兵部宗猛船をさゝかゞ陸より上をゝる人誰なんとゝゝ元就只一人陸より上ゝゝゝゝバ必
兵部ゝゝゝとゝゝれゝゝ果てゝゝぶバざりゝ井上伯耆と浦
と二人勇名世より二人ともちぎれゝる物の具をきゝゝ又定
ゝゝ得ゝゝもなく瀧田を討ゝ時も人ハ槍をゝて返せゝゝ
○佐ゝ木と三好と軍ゝて佐ゝ木ハ乱より陣ゝ三好ハ赤山より三好使
以て中村新兵衛とゝ剛の者ゝゝゝゝとゝゝん人あゝバ出さゝ上

人まぜもせで戦ハせんといひしかば佐々木が内々江州へかれな
き永原安藝守といふ者を呼ぶり出て修覚寺村石地蔵の前へ
乙出あひ〳〵永原ハ直槍中村ハ十文字ハ鎗にて散々に戦ひけるが
永原を突伏首をとる中村ハ近江國の人なり一日に槍を合する
事十七度首四十一級を得たりの有りれば世に槍中村と称しまた
永原を討たるハ時室町将軍霊陽院殿義昭江州矢鳴に
ましをせし在感状小朱塗ハ物の具朱柄ハ鎗をそへて給り
ぬとかの一説に按別を半分候しる松山新介が士にて
唐冠金纓の冑をきたりとかや

○相模の深澤ハ軍小北条家の先陣ハ大将小条左兵衛大夫綱
成敗北しくまたる旗をひろひ取て後に信玄写て逃
走てきたれく棄〳〵ふ那ど必地利をたのみて戦を心がけしるか
らん旗を棄しハ旗さしの恥なりいなでら恥らしべきなれ
田一徳斎が志子ハ源次郎に左兵衛大夫が武勇にはやられてかの
旗をあらへられり練絹三幅にて系ふ地黄にて八幡といふ二
字を染たる物にて世に地黄八幡とぞ呼なり左衛門大夫
かくと伝写て伝玄ハ図〳〵敷耻を雪ぐと悦ぶ色伝玄
遠き慮ありてかくハいはれしなり左兵衛大夫ハ甚比すぐれ
たる勇士なれバ喇〳〵ハたゝかひて必死の覚悟なるゆゑに
其鋒支がたしと察せられて其憤を義ぎん為と我〳〵

○永禄十二年佐々木承禎柴田勝家が守る所の長光寺の城をかこ
まて攻る遂に惣が国を打破る猛家中九〻まて支を守る途と防

戦ふ郷民佐々木が陣にゆきて此城ハ水の手遠く遥なる所より
水をとりいれ候をとり切給ハゞ城ハ保つべからずと告しらせ
ければ兼複悦て水の手をとり切られ城中已に困めどもよわれ
る色をかくさんと従来これをはかん為に和平せんとて平井と云
者を使として城中に入られ平井勝家に対面して手水を請ければ
に水をみちたるを小姓両人してかき出たるに平井手を洗ければ
小姓残れる水を庭にすてたり平井帰りてかくと云へバ事のたび
たる哉といやしみあへり かくて城中既に水渇られば勝家明
日ハ討て出切死にせんとて諸士をあつめ最後の酒宴して残れる
水を問へバ二斛計入べき缸をかき出させけれバ此間の渇をやめ
よとて人々汲のみて其後勝家眉尖刀の石づきにて缸を

砕きけり夜明方に門を開て出る佐々木兄弟もよくふせぎけれバ大に
敗北しけれバ勝家首八百餘級を得て岐阜に献ず勝家ハ於
長光寺にかくり信長感状をくだされ賞せられし事大方ならず
是より勝家を缸わり柴田と世に称しけるとぞ

○信長勝家をもて先陣の大将とし勝家固く辞しけれども又再
三辞しがたき仰を兼けれとて退出せる時安土の城下にて信長旗
本の士に遭ける事に行あたれり勝家無礼をせめて遂に切て
すてられけれバ信長怒られし其時勝家謹で申けるハされ
バこそ先陣をバ是非とも辞し申されし子細なりとて辞申べ
きや先陣の大将たる者威権なき時ハ下知行ハれざる故なり
いとよくいへど信長詞なかりけり

○三好家滅し時料理庖丁の上手と写えて坪内伊賀といへる者生ごりとなりしを放し囚ひ〻〻ゐる事程て後菅谷九右衛門に賄やり〻〻市原五右衛門坪内ハ鶴鯉乃庖丁ハ云ふも及ばぬ七五三の食膳の伐式よく〻ものれる者なりすの上子ども両人ハ既て奉公やれへバゆゑされて厨の事を司らせやさんといひると伝ゆて四季の料理させ其塩梅よろしんなりしを則坪内を〻て膳を出させ〻〻城信長食して水くはてくれざるよそれ誅せよと怒〻〻まつらバ坪内畏承い今一度仕らんそれも法ん〻應ぜバ腹切んといへバ信長許容せ〻〻まつりさてその翌日脂を出し〻〻ふ味ろ〻〻も紀半弟のみよりそれを信長悦て禄あ〻られ〻坪内辱さやてはく時ハ塩梅ハ三好家の風ちゐ〻もされ塩梅ハ第三番の注梅ゆり三好家ハ長輝より五代公方家の事をとりて〻〻ひめれバ何事もいやしく〻ゐ其好せ乃第一等ハ塩梅を時るなりゐまバいやし〻〻事ことろ〻ちとれ風味ハ鄙ゐるふ風ゐて〻へバ法〻〻ろ〻入〻〻なりといひそれバ写人信長ゑ恥辱をあ〻〻〻坪内が詞とゐひけるゐ

○永禄十二年四月　東照宮浜松ゑゆ〻せ〻ゑ時

ゐまゐハ今川氏真を武田信玄攻落し氏さいと紀の山家ゑ引〻〻〻〻を　東照宮父義元のよ〻をゆ〻ゑ遠江をバ徳川家ゑ〻をゆむべし信玄ゑゆ〻〻れ〻ゑゆうハさ〻ゐ〻ぎなりゆ〻バ小田原と相ゐうて両旗ゑて信玄と軍もべ〻ゐ

氏をいよ仰られしかば赤坂より掛川の城を徳川家よりうて
氏政信玄薩埵山にて對陣是迄ぜう合有　東照宮の先陣
後にへ攻入山縣三郎を追ちらされば信玄前後う
ぜうをきれく勝利有まどれを計て甲州へ兵を退され
まこゆる　東照宮も御帰陣なり
堀川乃城を打とさせる時大澤左衛門尉
はまこうを永禄十年　東照宮遠江を過半治めらる
一時降参しるもれなを
ぐまれ者ども去年よりもらぐまこうる面々相計て尾張主膳
村山修理亮人を大将にて堀川へひそうに一揆をかたへ通らせ
まうを待うけく討をんとをうこうめさず
して七騎にて打過させうひぬ一揆どもたかとは騎馬のかう
うれどかくもたうぐ其あくまう石川伯耆守数正通りうると
とてはて八先に通らせられしやまやはく討ぐさ物をこ悔
うこうぐ創業の人君天は佑おりうこと覚こうり世に堀川の
一揆を攻らうこ小此城漁の市こう所八船の出入自由ありこ
おしも引漁て唯一方口は城ありしば落べきうなくて皆討
ぜうまうを

○永禄十二年尾張の清洲にて　東照宮信長に始て御對面は
時他の刀持こう士式拾人とめこうこう植村庄左衛門家政御刀を
持こう通らんとこうこうをもちしとぶひまば徳川家の士に誰が下
知こう止るやとひとこうこうれ御前は白洲に居こうるを

信長ヲ〻く仰ぎぞと問ふ〻〻　東照宮うるはしき士ゝてゝと答ふ伝
長樋村八郎なる勇士ゝ今日の舎人大事ゝ能ぐ心安らぐべしあつ
まとう紀士ゝ行ふ〻ゝひとぞ歳ぜられる荘左衛門後出羽守とゝ

○永禄十二年信長伊勢の國司小畠中納言具教を大河内の城ゝ
攻る数月強て堅強くゝてちつとも引ざる信長織田掃部頭外を使
ふゝて信雄をゝて具教が子具房の養子ゝゝて和平をぞ〻も
いとせられゝば人質をゝ〻ゝゝ同じゝて和平事なるぬ伝長波
阜ゝ帰ゝ二男茶筅丸十二歳なるゝゝぞ士ゝなるゝゝ伊勢ゝ
行大河内ゝ入て國司ゝ射面ゝ船江ゝ行具教八世を具房ゝ譲
ゝて三瀬ゝいふ所ゝ閑居せられゝぞ尚信長小胥く志あり給ば
信長國司が家の名ゝを〻〻ひ天正四年十月廿五日三瀬ゝ

て弑ゝ奉り具房八信雄の養父なれば河内ゝ却こめて置まる
ぞ天正十六年ゝ死去廿ゝ元祖親房卿ゝ具房ゝ入て十世ゝ及ぶ
ゝるん具教の弟南都東門院が住僧なるゝぞ具教弑せるま
ゝを守南教をおて伊賀ゝ赴た還俗ゝて北畠具親と称ゝ
三瀬河股多藝小梨の諸士をかゝらひ仇を報ぜんと計れども
利なくゝゝ中國ゝ流落ゝ毛利家をゝゝ倫後が輩ゝ
居ゝ所ゝ具教兵を起ぞ天正六年信雄の兵波瀬岩が
城を攻ゝ六呂木山副波多瀬三郎以三人を生ぞゝゝれ
ど死罪ゝ不ゝ及ぎゝ浅せゝまゝゝ三郎ぞ容貌世ゝすぐれゝば
信雄ぞすゝ尾ゝといまゝ後三郎字て三人同じく生ぞれ
冠又相同じ二人死ゝ一人ぞれる事面目なゝ共ゝ誅せ

らましけへと又二人八年老ぬ惜むべき身よ非ぞ三郎八仰に従
ひけへとすゝめれども少入ぞ遂に三人共に磔にかゝらるゝ時に三人
君の御為に命をすつる事士の見ひ出面目ありて事終
とて詞をうゝひ物語〳〵に誅せられ三郎此時十五歳を
まぬ人なりしといふり玉井新左衛門と云者具秋に心を合せ
信雄に背しが父兵部少輔と母ともに彼戸にかれ居るを
捜出して柳田河原にて磔にせゝる兵部少輔子の彦次郎を
呼て汝今度君の御仇を報小畠此家を無んと志しゝる
士の本忠吾生前の悦れ是ゝ水を乞て父子三人盃をゝみ
かゝ〳〵其後殺されしぞ織田家此刑罰仁者の道にあぞ
其暴逆終を令せざる事左こそなりし

○永禄十二年今川氏真遠州掛川の城没落此時天王山ふく
合戦に大久保治右衛門忠佐敵をつき伏物の彩十郎忠隣に共
首をとりて渡り功名にせんと呼るれば忠隣十七歳なる彩が
人のこれゝ首行ようすべきにて敵此中にうゝりて首をとる
其形原にて諸軍散乱〳〵 東照宮に供奉人少か
ゝ〳〵御例をたれまぢ侍八歩立にて御供〳〵をゝ小栗忠
蔵敵乃馬をとり来てそれに乗まと仰ゝく其ゝに乗て
御供中ゝ後に相模守とゝ申せ〳〵八此人なり

○遠州にての事なりしぞ此時の事なり 東照宮の御内
に高木主水清秀村越与三左衛門ゝ兵二人味方ふたれ
ま細なふてをゝぢ〳〵と引退くを敵十騎計追来る高木

鎗おろとり直し一足も引ずに呼る村越弓を矯つゝ
塗わきを射ん心ぢらく鎗をせゝとひられば敵ちゝむ
人又引退くかくる事数度ふ及ぶかゝて左右沼ゝ一弱
うち此地となりてこゝぞよ死所とりてこゝ高木ぬき
留り先かゝる敵をつき伏ぶ村越大音あげ其首ぶれと
ゝに敵一人射倒して敵ひゝむ所を高木いさゝ進で又一人つき
伏ぶ村越も又一人射倒てゝとり追ぶれば心ちづふ引
ゝとり

清秀ハ水野下野ち信元ゝ属せ時三州苅屋の戦ゝ度ゝ功
名ゝ浦 徳川家ゝ仕水野ふ属せ時石ぶ流とり所で
三河の兵と槍を合する事一日ゝ七度石川伯耆ち十七家

ゝ内記といひしぶ進ゝ名のりゝ鎗を合せ組引ゝとりけ
ゝ長久手此軍ゝハ清秀内藤四郎左衛門武者奉行ゝ紀
清秀部の浦関ぶ永此時隠居せぶ州小山へ籠られ
バ度ゝ此功名を仰られ 台徳院殿綿の帽羽折を賜ハ
ゝ戦國の時も一日ゝ数度此槍ハ平ちゝなり
高天神小笠原與八郎ぶ士林平六郎遠州豆大寺ゝ六度
鎗を合せ信玄伊豆薙山を放火ゝ山縣をおはゝ逃ま
小塚兵衛ゝ玄引ゝ口ゝ三河の浪人河村伝兵衛白四方
ゝ船此字の旗ゝ敵を追ちゝ槍を合する事一
日小六度といふり

○太田三樂ぶ内ゝ太田下野とゝ士ゝ人を識る其羽たゞハぶり

しらば三楽いうれる故ぞと問下野別の子細もいひきとへば連歌
もする者の古歌を覚れハとゞ連歌ハ益とせんとゝ士の功名を
志さ者も又志なり其人ゝ此嘗好ゆゑよりく恥へバ十
ハ九ハまぐひいハぬものなりとぞ答ゝ
○北条丹後一尺四方ハ白練と思ふ蛾を繪ハ書て指物とする
を諌信ゝて汝ゞさ一抱ゝ小さハいるゝ子細ぞと問ゝ
丹後謀と味方ゝハ人ゝがくれべ一ハいれども進むと
先ゞ一退くとゝ思ハ後殿せんと他人の大なる指物も取小四半
と敵のゝ来ハ問ゝ
なりとそれ一とぞ
○浅井備前守長政王潤川をかぐりて齋藤龍興と軍ある

時長政五百計の兵をすぐり関原野上ハ宿ハ火をかけ柳井の
前ゝ小川ハ柵の木をひく往ゝ竜興一第計て出ると
長政ゆて百人計を菩提の往ゝ敵の後へまハ一せ自四百計
を以て敵のむゝを夜討ゝ敵ゝまを往ゝの兵もを集
ゝ思ひもよらぬ西ゝ鬨の声をあげ一ハ龍興内通の者ある
ゝ思ひ出ハて岐阜ゝひきとゝ長政大垣の名呼ゝ火を
かけ出せゝれバ龍興ハ敵勝と乗て大垣を攻るなゝいぐきすけ
よとて岐阜を出一ハ長政やぐて引とゝ時足往の物ハ取れる
を三十人柳井ハ土民の家ゝかゝ一ゝ龍興柳井ハ入て士卒
も疲一ハ兵粮ゝて一ゝ時かゝ一ゝ足往ども西へ
ハ火をかけく焼ゝる長政ゝひもよらぬ西へ一ハ一せて落く

ふうち破りやぶりて南宮山に登りて敵をまち龍興二度まで
敗北し口をしくもて四面をうち巻てあやまりぶうんとおもふ
うち長政ハ大軍なり十死一生の戦とハ是なるべし
されども下知をきき内ハ翁の一筋も射べうしたいひく攻かゝるを待て
山乃上より一文字に切てかゝまバ竜興大に敗軍し之より
長政を恐まて復軍をゝ事無りゝ
○九毛兵庫助長住其子三郎兵衛長隆龍興に奉公して美濃
の多藝郡大塚乃城にあり安藝伊賀守氏家常陸介龍興に
叛て大塚にあり安藝兵庫父子三百計大塚より一里ばかり
出て陣し城近き百姓老若男女をいそがの催しあるに
竹竿をもゝせ大軍の体にもてれしはひる氏家を撃破り
しうバ安藤守也又龍興に降参し九毛父子に禄を増し感
状をあたへられゝ
○信玄駿河に攻入時朝比奈兵衛を始として軍すゝ者ゝ今
川氏真落らまてゝバ信玄とく今川の館に乗て名物の寶
物ども奪うり来まて下知せゝゝ馬場美濃守氏房聞もあ
へず唯一騎鞭に龍を合て鎧に掛け入火をかけゝ焼たゝゝし
乃ゝ是宝物ども奪とりゝ貪欲の師なりと嘲れん事を
慮ゝるなるべし
○元亀元年の春大友左衛門督義鎮肥前の龍造寺山城守
隆信をうつ隆信和を乞しゝバ大友兵を加へ肥前と筑後
乃堺に千栗といへる大川あり吉岡下総入道宗観といへる者龍

造寺ハ大敵なり傷負もわるまじく故あらく和を乞しハ謀あるべ
千栗をとらるゝ事たやすしとゝへハ義銘も尤なりゆゑて
豊後ハ留守小置くゝ佐伯紀伊守惟教女子孫四郎惟高
田原近江入道紹恩を呼寄六千の兵を二陣とゝて千栗ハ
渡小備へく川をとらゝ隆信と半ばとりて敵の引退ん所
を不意に撃んと謀ふ大友ハ設有事を覚て退ざるゝ
となり

○元亀元年六月信長朝倉をうつく龍ヶ鼻小体に　東照
宮援兵の為廿四日江小小御陣評定の時信長鎗を持出
て此陣ハ鎮西八郎ハ鏑あり徳川殿ハ源氏なまバなれ
せハ明日ハ軍に勝利ハへとゝて秘蔵の虎の皮なりを

の御絵是なり

○姉川の軍小信長ハ龍ヶ鼻山を左にして浅井長政小向ふ
東照宮ハ龍ヶ鼻を右にゝ朝倉ヶ二万あまりに向せるゝ時
小笠原與八郎氏助二千計先陣に進で川を渡る氏助ヶ兵伏
木久内中山是非之助吉原又兵衛林平六伊達與兵衛門奈
左近右ゑ門渡ゑ金大夫照七人鎗を合すゝ中ゑも渡ゑ朱の
傘小金の短冊十八ばかりゝ堤の上を進む信
長ハて其夜召出ゝ天下ハ治なりとゝ悦状に貞宗の刀
を添てゝ下ゝらるゝ時ゝ六人ハ者ハ憤て各拾ゝ鎗を合せ
しゝ畠の中なりゝ左ハ足ゝ先らまでひとゝ切れバ六人ハ
信長感状をあゝらる

○姉川ゟ酒井左衛尉忠次先陣ゟ二陣ハ榊原康政と酒井を始小笠原与八郎菅沼新八郎奥平半川を渉てかゝりたる岸高く上をかゝ[illegible]榊原真一文字とすゝむで上をゞる紀家を無三無三ゟおゝあげよと名いとゝゝゝいひくわゝあゞり酒井が先ゟすゝんとするを見て酒井が兵おくれてハ無念ゟと競かゝりく利を得ゝり　東照宮榊原が二のまれたるゝ兵の手なゝ二乃ゝハかゝれゞくゝたゝとゝ仰ゝりゝを

○姉川の戦ゟ坂井右近が子久蔵十六歳ゝて討死て久蔵ハナ二の時位也始く京に入ゝ比近江小郡ゝて鎗を合せゝる剛の者ゝ三井角右衛門ゝ生瀬平右衛門ゝ二人とも久蔵が首を得ゝりとゝ二人後関白秀次ゟ仕へられバ此事沙汰ゝりく三井がゝゝゝゝ

なりゝて鷹部屋ゟおゝて罪ゝ行まんとゝに三井いのちゝ惜むゝ非ゞ人ゝ功名を盗ゝ悪名の子孫ゝ恥ゝ事口をゝくれバ今一度位浅ゝくたゝりれへ證據ハ浅見義者ゟゝ問まゝるバ実否ゞゝくゝゝゝと訟ゝり浅見を安土ゝ呼れゝり浅見ハ生涯ゝ之ゝ[illegible]ゝ友なり三井とハ日比中ゝゝゞ不通なれハ疑もれく三井がゝゝゝゝ定ゝゞ三井惑乱ゝて渉見を使人ゟゝゝと誹笑ふ人多ゝ出て聚楽の廣間ゝ奉行列坐ゝて翠部淡路守をもて尋問ゝ浅見ゝ生涯ハ年ゞ彼の知音なり三井とハ不通ゝゝゝ是非世の人ゝ評せん事も迷惑なり他人ゝ仰付らまゝゝ懇ゝ辞ゝゝ中ゝゝぬ三井が虚妄をゝゝゝ心ゝゝゝぬハ理なれも證人ゟひゝゝ

上へハとくやせと勧らるれども扨辞しやに秀次ゆゑて重て辞に
ぞ〻ぶとなり〻まこバ其時浅見今ハ已事を扨ぞん武義れ
論ずも詐偽ひまず坂井が首ハ三井がうら〻ふまざれ
又甘〻〻〻紀も比類ずくん生瀬ハ行と存過〻〻やとひ
〻れバ一坐該てとかくいうくこまりて三井を赦く
賞せ〻〻生瀬ハ秀次と寵せ〻〻のあく罪と及ぶ右近ハ信
長の大将なり三井生瀬ハ犯倉浅井両家の士なり法度と
後京極高次と仕へ〻〻大津乃城ゆく武名ゆ〻〻〻を
○信長浅井長政をうつ時長政が本造の陣俄とをわぐ伊の見
〻〻〻バ猪子兵助を物見とやらまるぶ又金松弥五左衛を
も出さまるり猪子馬ゆ白あとかゆせく地帰と敵ハ引退れと

いひもまぬゆ金松兼帰と敵ゆ〻せいとうひすて〻又先陣に
ゆいく鎗を合せ〻り信長後ゆ二人を呼て汝等乃ハいち
ゆと問〻〻〻猪子敵ハ若つまる〻馬を遥ゆ遠く引のけいなど
と引退くとの〻ハ金松承と乃〻ハ猪子ゆ問〻くいさ
まてん軍状志ハ長政ゆ〻て空〻く退べきやゆ〻せ
て戦ん為とをぐ〻ひとやせ〻バ信長大とほめられを
○信長越前と攻入時朝倉義景二万汁の兵〻て刀根山と大
山と陣どり禁と信長の先陣ひく居〻り〻る日信長井樓と
上ぼ敬を乃〻〻〻敵ハ今夜必引退〻ぐ〻先陣の若木なお
こ〻〻とと使を度々やわく下知せ〻る是を守て殿ハいそぐく
ハ仰ひやん敵大軍と〻て山と據を地の利を得く且主我れ

バ仁条引退ぞきとあやまりて夜ニ入ても信長ハ桂井橋ニ
至て敵陣を覗で目もたれぞれて有しぶ丑の刻ぞうすハ
や敵ハひくぞといつわりてたき螺ふきたてたて馬ニ乗先陣
の大めの山れやつだんぶ田ぶん〳〵ふ旗本れ者ぞ〳〵功名せよ
とて志一文字ニすすまれしぶ累して先陣ハおくれて信長の旗
本ニて勝利を得らまたりの信長常ニおくゝる者ぞ大ぬゝ山と
てゝ〳〵ハまゝ〳〵ぞ

○上杉の奮ぜ上野れ長野信濃守業正ハ在五中将業平の後
胤なりといをり世〳〵上野ニ住ハ此城ハ大名明神れ山の
尾崎をとりく城れ郭とて郭の形箕れ手ニ似りて箕
輪といふ上杉家衰りれども擺立て武威を炮ふ信玄ハ
属せぶ信玄ゝゝと五年終ハ一度もおくれをとりす
病れ後二年を経て落城ものり

○元亀三年信玄参河遠江ニ軍を出し二股の城をとり老水
の手をゆり切りまぶ中根平左衛力の限ニ支へられども竟ハか
なハで城落りりぬ信玄ハ箕形原ニ軍をすゝむ濱
松ニハ織田家の加勢もあと信玄ハ手ぞ来て客戦ハすぞ
じきておさへをおくべきやとりぞ三仁の武者城をもりぞと
ゆゝられハ仕ぶバ一戦ニ及ぞ備ぞり有濱松の軍兵日既
暮なんとすゝめでもいさみりゝ一軍をべしと口〳〵ハ鳥
井四郎左衛物見して参ぶりて人〳〵ハいりハれも今日の御合戦ハ
然ゝぶ敵ハ大軍れ先陣ハ使をやり兵をなぐさせま

り是非法一戦となるべば敵をつよの人へ切ゆんきをちらひく
かゝらせうと中ス　東照宮ゑ召汝ハ用もゝろぶき共ゝ
ゝの物見ゝやゝゝふ仰ておれゝゝや目前ゝ敵をもあゝと
通ゝてゝ生がひもなゝゝと怒らせゝ罵り目のあた
ゝゝふゝて勝敗ハ利害をバ見ゝハめてゆれへ御敗軍をもろ
ゝ召法かゝりゝ人ハ殿の御仁ゝゝゝゝ儲紋の仁ゝ知
ぬ人ゝゝおゝゝ考ゝと以ての外ゝ罵ゝゝゝ成瀬
義を尋ゝゝふ功名ゝゝゝゝ即ゝゝゝ討死ゝゝゝ
味方原の芝表をゝけを定ゝゝ時成瀬と鳥井と先後
を争ふ事ゝゝ既ゝ刺ちぶく死ゝぶき色あゝれを
かゝの人ゝちゝぶゝゝふゝ井成瀬ゝ向ひく時信

丟と一戦あゝぶきなり織田家の援兵も来ゝゝ士ハ二人
も大切ハ時ゝふ私の争論ゝゝ死んハ不忠ゝゝぶゝ二人
共大死ゝて殿ゝ損ゝけをんゝゝの軍ゝ功名ゝゝ
ゝて討死せんハいゝゝ成瀬少ゝとゝひいゝゝゝれる
哉わゝも左ゝゝ明日討死せんいざゝて酒ゝゝかゝ
深更ゝ及べを　東照宮ゝゝをゝゝゝゝで成瀬ハ信長
乃加勢の目付ゝゝあゝ井ゝ坂ゝ向ゝゝゝ井ハ深夜
先陳の目付せゝゝゝゝ作ゝれゝゝ二人ハ忠死を覚ゝ生ゝゝ
ゝ井も一所ゝゝ二時先かけく二万作ハ敵ゝ純向ふゝ井
曽首三ツゝりて成瀬も首三ツとりて切あひ共ゝ打ゝひて
首をバ抛ゝて又かけ向ふゝ井又首とりく成瀬をゝゝ

只今山縣が陣へかけ入て討死し敵共をとりこめて
をゆて成瀬と先ゞ〳〵と汝ハ引て帰て朋輩よかゝり
いへと役者ふいひすて信玄ハ旗本を出してかけ入んや
せを土屋右衛門ぶるまれ者ども引かゝみ〳〵を引ハすゞれて
半〳〵尺〳〵き剛の者〳〵三尺余の野太刀を打ふり死
狂ひ切て回る土屋が曽を破よくぶけと斬ふりくふ目眩
て馬より落る多兵四方より捨すゝめふりてゝ井をうち
ゆゝふり敵も味方もおそれて惜をあゝり
渡邊半藏ち綱も勢ゝして池帰ひとも味方中ゝ危くん
先陣をよび返させゝ〳〵ふんさてゞん壮士等いさゝかりて
柴田七九郎大久保治左衛門すゝゆくを生ひ〳〵と背を

ゝ〳〵ゆ入ば甲斐の先陣小山田に向て足軽をかゝる軍始ゝく
先陣乱れ足ゝなりふれハ石川伯耆守数正馬より下りふち
鎗を挑げ一足も引ずと呼ひ一陣の士卒各折をきて落ぶ
すはを仕り待ふけふり甲斐の兵競かゝ〳〵近〳〵と引受一
回ゝ立あゞりをいゝと声をあゞて退かゝ外山小作一番落
を合せふり日暮れバ甲斐の大軍進みかゝる　東照宮御
旗本をひきゝかゝ切てかゝらせゝんバ遠江の山家三方小山田
退立〳〵ゝ敗ゝふり申れ刻ふゝ軍小衆寡支がゝて崩ゝ
向て引退く信長ハ侍大将平手汎秀ハいかゝ正ゝ延合
せ討死ゝ鳥井忠吉を為ゝて河洗原次郎長谷川

紀伊守加藤二郎九郎ホ逞兵三百餘人討ましを敵もさうて退
来る本多肥後守忠直後殿しゝく敵近付ぞろてゐて遂ホ
討死さて甲斐の士大将秋山伯耆守晴近透間なく追うけ
をり沛馬まうりおり勇くなりしゝば　東照宮沛馬をひき
うへさせられし時夏目次郎左衛門吉信おいて沛討死の時ハ
はいたとて沛馬の口を濱松の方へひき向鎗をやり通し
沛馬のさんづをたゝきくさきゝられば沛馬かけ出ぬ夏
目ふゝ止り多勢ゝとうまれ捨れ柄の折ゝ計ゝ敵ゝ討
死さて
夏目ハ濱松の沛留守なりしゝば矢倉より軍れ様を見て
いそぎ駕籠ゝ乗ゝ沛城ゝ帰ゝせゝ吾城下ホ

於て御ものけ為バいのら生て行ようせんとて沛馬副の者ゝ口
をゝゝれ世と仰らるゝを吉信沛馬の口ゝをゝれしゝとかゝく
下知ゝ馬より飛下ゝ沛馬をなをりれへ討死仕ゝべし
とて沛馬に付ゝる畔柳助九郎ゝ下知ゝて沛馬を法城
の方ゝひきむけさせ鎗の柄ゝく沛馬のさんづ突きさ
取て是ゝ十文字ゝ鎗ゝて退ゝる敵を支て討死ゝる
もゝゝりそより前三河一向宗一揆の時彼宗門を信ず
る人ゝひしゝくと相あるまり樣井の松平監物上総の遠井
將監大草ゝ松平七郎もくみゝゝを中ホも夏目次郎左
衛門ハ一族も多ゝりるぶ彼宗門ゝ徒黨ゝて已ゞ知ゝ而
小要害をかまへたゝゝゝと松平主殿助伊忠不忘

又おしよせ木戸を打破て攻入るハ夏目防ぎゝ帑藏の
中へかけれ入るを試殺すハ籠の中の鳥を殺すに似たり生
すけくことを仰る主殿うち殺して後ハ殿を抱ていひお
ゝ人数を引やりぬ夏目岡清九方をふ〳〵かゝ仁
愛ぬり紀殿へ楯つき事の悔さとて世の目より宗門の
本尊の恥へ寄て殿の御為へいのち捨すてさ勢まられと
いのるゝぶ果して義死をとげゝるより又一説へ夏目大津
宋右衛門伊織乙部八郎等六千餘額田郡牡田の城
へ寄て籠りゝるを深漆の城より松平左助伊忠是を
攻る乙部ハ城より一向宗へ帰まで夏目と無二の約束
ゝ夏目ゝくこゝりゝゝ遂へ出ゝそ出ゝ事を案〳〵
夏目をたすけん為へ久留善四郎とおもうり伊忠へ内通
し寄をを引入しゝバ半右衛ハ針崎へおちゆ夏目ハ藏乃
中ふかゝるゝを乙部へ夏目を助けんと伊忠へ乞ふ乙部が
朋友をすてゝ事を伊忠感じ夏目も又武功ゝ者
也藏を少りゝ紀ゝ共昔をなゝさゝれバ御赦あり
ゝを夏目為へて一揆へくゝせゝる様怪しゝ義より
出て伊忠へ降ふ〳〵くゝゝゝいたり
水野左近大夫もひき出ゝ支へゝまでも敵ゝをひかれバ
又御馬をひき返せゝ義田治郎歩ゝらゝて御供へ敵六七騎すゝみ来るを
成瀬一騎切て落し御ゝるをかへさせゝへバ六騎ハ退ぞゝ

大久保新十郎忠隣馬のかゝへをさるまゝに大久保七郎右衛門忠世さいがかけの為に旗を打て敗軍の味方をあつむる其ひまに濱松に引とゝせるひろり敵城近くおり寄まゝ多居彦右衛門元忠玄默口より討て出る敵ふ濱多宗藏兄弟櫻井庄兵衛名のりかけて後を入敵五人討とりおかゝる歟を追ちらす石川伯耆守と大久保七郎右衛門と相をとり鉄炮をたゝゞ打ふちらてきすれバ味方疲をとりふ天地三郎を敵味方疲をとりふ天地三郎を敵大久保七郎右衛門と心を合せ敗軍の中を求めく鉄炮只八十六挺ばかりを引具し信玄ハ陣さいがけに向てうちかけゝるば甲斐ハ軍夜合戦に成ぬとあはてゝさいゝ案内

又一説其夜酒井左衛門尉忠次今夜武田の軍兵疲ゝ人ハ必定なり夜討せんとて志のびを出し信玄ハ陣屋ハ柱を見せるふ爰に八行ハ旗の紋ばかりとる此いろハ旗を立てゝ引退ける体を先にとりかゝるゝ伝玄ハ慮後陣に引退ける体を先にとりかゝるゝ伝玄ハ慮ゝ出ゝ表討ハせ出ゝ後に守ふ平ゝ夜信玄の士卒一人も移ハれる者なゝ

夜あけて信玄兵をかゝへておさへに越年ゝ是元亀元年十二月廿二日遠州無形原乃合戦なり

○無形原ハ軍終て皆濱松の城を攻んといひるふ信玄

勝て曽の緒をきむることいふことなくて軍をかへされうに時
信長ハ白須賀ヨ毛利河内守山中ヨ瀧川伊豫ヲ吉田ヨ稲
葉伊豫守其兵三万あまりまておられうり伝兵勝ヨ来り
て引とるまでハ信長二万五千をひさめておうるを毛利滋川木
も引もよりぬ事ヨ打てかゝるなどれらば必濱松よりも切く
出中小ヤうとゝるく軍せんと吉田より岐阜まで一里小一人乃
ちたびの者をおいく待まうふ信玄ひさをされうようて
信長の謀ゝくなりぬ

○味方原ハ軍ヨ甲斐の兵をたゝけ追かけうるるバ
東照宮幾度びとゝるく馬を乗ヨ大久保五郎右衛忠
次手負て歩ざるとなるゝ菅沼菱定吉ヨ詞をかけて

忠次を馬の前輪ヨのせて退うるを後ヨ菱沼ヨ長光の
刀を賜ハりく賞せさ給ふ菅沼又引返て追くる敵を
防ぐり天野康景長坂添次郎坂部又十郎等も必時彩
ヨく防戦ふ大久保相模守為ハ十郎ヨを射ゝまて歩ざちヨ
て危ふ事を防ぎて小栗忠蔵久次と称ふ小新十郎
ヨ成者ありて助けよと仰られしバ久次巳が馬ヨ忠隣を
抱さのせくり退く敵透間なく追ふ来るを武者あり
ゝる球型中三又郎重次乗合せて討とられバ後ヨ信國ハ
刀を賜ヨ畔柳助九郎馬のかゝをなれぞ後ヨ重の
扇を給りて賞せ給ふ打敗ヨ追ふ来ける
ヨ水野太郎伝ふゝ防戦ふを伝ふ馬

を引返さる成瀬吉右衛門正一ハ兄が最後ゝ汝ハ此あるべし
案内よくもあれ是御供して憑あく引とゝせ奉るべき由云さ
まゝうバ御側ゝつきまうしが引退きて敵を退きそけ終ゝ
演松の城ゝ入らせ給ふ鳥居彦右衛門元忠ゝ御下知ゝて去
黙口の御門をひきて引ゆる逃入せらるゝ敵きたり
来るもわがこゝる城ゝたやすく討入ぬきやと門を閉ぞて
かゝる火を所ゝふたくべしと仰らる此日ハ天曇て雪ちらく
雪まぎれゝ甚ゝ御供して馬より下立城中ゝ入ゝ松平ハ
京三郎康定松平弥九郎景忠平岩七ゝ助親吉大久保忠
隣菅沼定吉都築惣左衛門秀綱多ゝ都築が妻粥を拵
世来て御供の人ゝふくぞうあゝ後ゝ衣服を賜て賞
美ゝ今日敵の跡をふんで戦ハゞ猶べきゝ味方ゝやゝ
て心なゝぞ敗軍しぬ口惜き事なりと仰あゝ湯づけ飯
を侍女久姫まうゝまバ三度かゝ参ひまつれゝりとく
御枕をかゝゝけられいびきかきて御睡ゝ山縣城近く攻
ようせ門ゝ扉を半ゝふ暇なゝと定ゝりいふ攻入ゝやとゝ
を馬場美濃守ゝて打きけゝ引とゝられバ門をとゞ搦を
も引ぬゝたゝハふくかぐゝ火白日ゝ謀あゝべき
うかゝゝ攻べゝゝ徳川殿ハ海道一の弓とゝなゝよく
見届てゝとて猶豫しゝ家ゝ城中ゝより鳥居彦右衛門
渡多半藏同半十郎搦井荘ゝ助勝屋甚五ゝ衛ゝ始ゝ
てゝゝきゝの剛ゝ者ゝも百餘人突て出しゝバ甲斐の兵虎

三ノ九八終

口を引退て攻ざるべからず

常山紀談卷之三 終

常山紀談卷之四目次

一 山崎長門守詫美越前守討死の事
一 中川重秀和田惟政を撃つ事
一 梶川弥三郎槙島先陣の事
一 山内一豊馬を買まつる事
一 奥平貞能父子帰降の事
一 東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事
一 渡邊守綱を鎗半藏といふの事
一 謙信草騎佐野城へ入まつる事
一 大河内政房節義の事
一 鳥居強右衛門忠節の事

一 酒井忠次鵜巣城を乗取まゝ事
一 長篠合戰の事
一 内藤四郎左衛門返答の事
一 多田久藏が事
一 佐久間信盛偽て勝頼へ降る事
一 二股城攻内藤櫻井功名の事
一 芦田信蕃二股城を退く事
一 信長公秋山伯耆を刑し給ふ事
一 松平忠次諏訪原城攻落し給ふ事
一 山内治大夫進士清三郎功を讓る事
一 長九郎左衛門能登國發向の事
一 越中ゟ謙信月を賞せゝる事
一 信長公松永弾正を恥しめ給ひし事
一 山口六郎四郎奥田三河ゟ高屋城を落る事
一 長坂釣閑跡部大炊邪佞の事
一 東照宮勝頼と大井川を御對陣の事
一 栗田刑部幸若が舞所望の事 附 時田が首実験の事
一 岡田竹右衛門見切の事
一 朝日千代西郷伊豫を討つ事
一 菅沼定盈騰氣 附 山口五郎作後藤金助討死の事
一 岡嵜三郎君の御事
一 摂津國花隈城落る事

一　高天神落城仁科信盛戦死の事

常山紀談卷之四

備前國　湯淺新兵衛元禎　輯録

○天正元年江北の軍に朝倉敗しるバ信長の兵退散を急ぎ給ひ彩倉が士大将山法長門守詑美越前守柳瀬にてふと止星文へるるたゞ中にて討死する者多し山崎も大軍乃中にかけ入て討死せり詑美矢立の硯をとり出し詩一首出て落ゆく者にとゝのへて友にとゝかへしをとり

萬恨千悲有蒼然誰識今夜入黄泉故園更莫灑愁涙屍暴戰場唯是天かゝゝゝゝゝ戦て討死しるる其間に義景のがれ得て越府小ひさゝまり

○天正元年 將軍義昭織田信長と不和の事 出來て和田伊賀守惟政將軍は味方して摂津の國に陣を作る長和田を始め〻〻誰某が首を取り〻〻〻〻〻〻〻〻者には恩賞と書記して札を立らまつり中川瀬兵衛重秀乃此時は荒木村重の屬〻〻〻〻〻〻〻〻此札を打見て和田が名を点をかけ自姓名を志る〻〻家に帰り妻に向ひ事の由を語りて万一生て帰るるバ又こゝに足糸をべられといひ〻〻小書聊患る色なく〻〻バ軍の門出祝〻まく〻とて養すゝめ酒とり出〻〻其夜子の刻ばかり伊賀ちが首とらく来りて村重大に悦さいらでかくたやすく和田を討はたす我〻といふ者秀さんひ明日必義を決さだ〻〻ばれば討〻〻老ぬるべ〻〻ば図ばく

死むいのちを此夜の中にすてゝんには和田が首とり浮つべし敵も此〻の合戦を大事に思ひ淀河の浅深をふまへゝんに惟政さる大將なり物見を出めむべ〻〻ば自ら来らんは必定なりあつまり討とゝんとおもひ又討死せバ多くの敵は中に入て大將の首やゝんとて討死なるべと人いゝんは武名は朽じとおもひ是ゆ水をわたりなるこの深の柳うげかゆ〻〻れてやつ案北ぬく和田二陣に飛ひ〻く出来る紙はさざれ入終ようちとりて水中に飛入のがまに立て帰ぬとやられば人〻感じあへる事大方なり〻〻ぞ

○天正元年信長霊陽院殿を宇治乃枯浄の城に攻る時打しも雨ふりて川水岸をひたせり信長馬を水涯に駐く昔は梶原

佐々木も鬼神にてもなかりしかとも小武者一騎川へ
うち入さまを見て梶川弥三郎高盛なるべし梶川討もれ渉せ
と下知してそまつなりしかとも先にとうち入てとりこもる武者乃
前に信長黒のうまを梶川にたまはる其時信長梶川が志重
ての冥加をいなんかんずる者なりとあざ笑ひていとまつが果
しなく其河に出ばハざりきなり

○山内土佐守一豊はじめ織田家に仕へしより東國第一の強
馬なりとて安土に牽来てなりたる者あり織田家の士共を
乞ふ誠に無双の駿足なれど價あまりに貴くして求むべき
人れくなくして牽て帰らんと守一豊其比ハ猪右衛門と云ひ
しが此馬望に堪ずとれども叶ふべきなれバ家

帰る身貧きなれど口惜きまにハ一豊奉公の初にあつて
まかるる馬に乗て屋形の前に打出べきなりとひとり言られバ
妻はなるべくと笑て其價ハいかゝなりてなれと問黄金十両と
こたへひつまと答る妻聞て はゝあるべくとひるんにハ其馬求め
給へ其料をバまうけたるとて鏡の奩の底よりとり出て
一豊が前へさし出すに一豊大きに驚き後に此年ごろ身を尽く
て苦しき事のみなりしに此金ありとも知ざりしに此方ハいかん
悦び其ハ恨む妻仰の旨こそ尤なれ此金ハ其方に渡すべ
しハ此法家に家に財父此うぶみの下に入まひくなるべしと
の常ならぬ物語ふべきなれ用ふべ汝が夫乃一大事とあらん時ハ

ゆゑ〳〵をもて戒〳〵まひいきはまバ家の名〳〵きも世の常な
きバ堪忍てもるべし誠に今度京にて馬揃ひ〳〵と云れバ
此事天下の見物なり君も又佳人の始なりよい馬召て名馬
せさ〳〵やうさんとなれてこそなれとい上一豊悦ぶ〳〵限なく
頓て其馬求てそり程なく京にて馬揃あり〳〵時打乗て出し
うバ信長大に驚き思ひもれるやとて事の由ゆゑ東國第
一の馬遥に遠方にひきて来たりを見〳〵帰さんハロをし
き事ととそれに年比山内ハ久〳〵く浪人してゐ〳〵ゆゑ
家も貧〳〵うんに求得るハ伝来ぶ家の恥をすゝぎるに
引負〳〵ゆゑ身代きゝ〳〵みを見るに事やあると歎て見に
に次第に用ひらまて〳〵とぞ

○天正元年三河作手城主奥平監物貞勝入道々文子
義作守貞能孫九八郎信昌皆勇氣豪〳〵ち人にて見
に近ごろ道文八武田家に心をよせ勝頼の士大ゐ利を仕の
本九に対奥平父子八外郭にあり信昌信玄の死〳〵事本
をかくるを悟て居〳〵ゆゑ父に東照宮より加多豊後守
廣孝を以て帰降のゆを申あるに信昌父と大父とにすゝめ
て密約をなゆ武田家奥平小人質を出せと下知せらるゆ
能いろもすべき謀なくて庶子千九十三郎になりるを黒
屋甚九郎をそくて出〳〵ゆ　東照文を不忘て被打べき策
を家臣に以て告をる武田ゆも見をたやすく土屋右衛門尉村
黒瀬に左ゆゆ使を以て貞能を呼よせ携れの検使城所

道壽も出向ひ二心あるやうなる処にて来られるよ神妙
こそと詞をかくる処能かるる時よハ父子の間も疑ひ事世乃
ちゝひなり能た愛子ゝてハ千丸を人ぶちゝ出ハバ行れ子
細のなべさやと強くいろゝあれバいざ碁をうゝんとい一頁能心
ちづりに碁をうち終て眠をして門外ゝ出るを其道寿又ハび
わゞ湯漬飯を出ハ夜能ゝまを食するひ下ゝ道寿士を
門外ゝおゝ待居きるる頁能ゞ士ゝ向ひてゝ人叛逆あらられ唯
今ゝ対ゝ曲をいゝせられも奥平ハ家うちゝ引ゝひて更に
強くいろなゝこれハ夜能ゝ武田方ゝていろるるもゝ
ゝ吾首をゝざゝ本ハ強く来ゝれと固くいひふくめ
ゝりをかゝ出べりゝて夜能逃げ其夜一族寺具して

退散ゝ岩嵩ゝ赴られバ松平主殿助伊忠本多豊後守廣孝
等　東照宮の仰を奉て出迎ひて溯山ゝ引とりるて

○天正二年四月　東照宮天野宮内左衛門景貫ゞ大井の城を攻
させるゝ時霖雨ゝて兵粮運送の役ゝ三倉ハ砦ゝひさ
ゝ〻せるゝ変を天聖討て出ゝるゝ高山光明の城ゝより
も出あひ田野大窪の人民も相加ハりゝかゝゝより鉄炮を
うちかけ声をあげて攻ゝる後殿の人ゝ防ゝ討ゝ
ゝ後ゝめさべ　東照宮三倉ゝて〻ゝ召引返させるゝハ
ちや敵ゝ引ゝるを玉井長右衛門後ゝるゞ股を鉄炮ゝて
ゝ〻せ伝ゝ紙ゝるひて三倉ゝまゝ引られバ手負ゝる
ゝ鉄炮の音をあゝくゝとひゝに軍をゝるゝ此馬

又のまて作〳〵まゐるまゝおりさせまひらり人〻君の士を
いさ〳〵せまつて歎ぜさる者なり　大久保七郎右衛門尉忠世が同心
杉浦久藏（一説熱田の人久勝と作る）深手おひまつて七郎右衛門馬より飛
おりをとゝ為て引ものでけとゆふ久義うつけさるるの所
うゑ上ぶめさる者ハいら斗討まてうたゆうあゝん大将を又人
れ馬ぶれまさる拾ハ八幡も照覽なるまゝ乗まゝいとゝいへバ七郎右
衛門礼伐も而又よるぞ〳〵といへバ久義又れ以ておを乗て生
大将をすて殺してハいでせんとて弥ざれバ七郎右衛門いあらバ
馬をすてるよとゝひすて〳〵ひくんとまゝ延ふ小三甚内（一説石上勉能弛来）
又七郎右衛門ハ早の死さるぞとゝひて久義をひきまて馬に
ちのせやぞて七郎右衛門ふ走又つまゝり七郎右衛門ハ兵藤弥

惣と犬又ゝとゝふ小者と三人ちつまて細道の崖と引退〳〵ゆふ
ゝ退来る者七郎右衛門をつまおゝた二人もつゞいて飛々る而小犬又
うあげ刀の蝶れさゝ拾を拾〳〵を投すてゝるを敵又てゝれをとゝ
んとする而を弥趣走をうゝかをぐりとゝんとすれバ敵弥趣を
一刀切〳〵ゝふ七郎右衛門つゝく又て故三人討れゝ
東照宮剛将の下又弱兵なゝと忠世を侍賞美あゝゝ又
○東照宮と武田乃兵〻大天龍ての戦ふ近茂侍次郎まゝひく
渡辺半藏ち綱をとゝけまゝひゝ〳〵ぞたまて退ゝゝゝゝ
又ゝ〳〵手ふ提げさる者を投すて〳〵傳次郎を肩まかけ三里あ
り引退てゝすけゝれバ　東照宮召味方一騎討ゝれバ敵
千騎の落とゝゝるゝ乃又味方をたゝすけゝるハ七度の淦を

合せるよりもまさりて今より後鎗は義といふべしと仰ら
れ後に半藏人にかたりていはく伝次郎をわまなれバとて
けさまにかたりてのけおわもべきかゝ時ハ大うと者をてゝ体
ゆゑとて刺殺して棄らるゝ味方あれバとて報ずるハな
らぬものゝいひもちゆ
又一説永禄五年九月参河の八幡にて今川氏もと三河の軍
戦あるゝ利あるゝぞ二手にわかれて引退敵急に追ふる
半藏ち渥石川牧九郎に合せ三度槍を合せ後に八は義
一人十度小及て小ぬゝもて又三度槍を合に矢田作十郎足
をいるゝ引ゝるゝ故は義肩ひきうけて退りられよ
と鎗半藏と人おいれゝとゝり は義弁を半十郎政綱

とりゝ後味方五度ゝとゝ味方原の軍小草鞋ぬ諸ろけさう
を下に居て結びゝを半藏いとげども心ゝづたむすびて
引ゝれと兄の は義半十郎の者ゝる剛の者ゝる半十郎がゝと記ゝ
ぶゝゝ者ハつひに兄ぶと常小語ゝりゝゝぞ

○天正二年北條氏政三万の兵をもて佐野政綱をかこゝゝとゝて
謙信八千計ゝ兵をひきゝる後詰せられゝり城危しとゝゝられぞ
徳住後老ハ見れにおゝゝゝ士大ゝあまゝられバ心やもゝ佐野の
城ゝておぼつゝゝられ先ゝれハ城にかけ入て力をそくなんとて物のを
も見ぶで思ひ木綿の胴服をうちかづり十文字の槍を横ま
僅に十三騎ひき具ゝ氏政の陣ゝ前を馬を静にゝゝゝませ佐野
乃城に入ゝゝを氏政乃家兵ゝて夜又羅刹とハそゝゝるべし

まて恐まてく近ぢく者もなく氏政圍をそいく引退く
を諏信やぞて門をひ〳〵り努ちくども氏政一軍もせで引
たりでさすり

○天正三年勝頼高天神の城を囲んと師を出し小笠原與八郎長
忠軍の目付大河内源三郎政房と相議して防だりり　東照宮
後信を信長ふこいせるに勝頼城の巽に嶺に陣〳〵大文字の旗
を中村の内公文といふ立る後まで其地を大旗と称せ兵
粮竭士卒疲るまバ後まを待〳〵姉川の戦功を捨させ
ふと怒て七月二日城を出て降参を冨に目付大河内政房ハ
應政公の妾華陽院乃獨り猶降〳〵ざる〳〵ちバ小笠原
宝どりて石の牢に入置ぢり勝頼降ぶバ本領小倍〳〵てうて
行ぶ〳〵と説せられども忘を変ぜば勝頼怒て牢の口を鎖し政
房ふ〳〵と高天神落城に及ぶまで八年に間牢中ふ居
甲斐に士横田甚五郎立る天神に来て在番せ〳〵大河内節
義を保く〳〵城に移んごろふいふりたりかくて　東照宮
天神と攻させるひて天正九年三月廿二日の城乃守将冨沼
丹後真幸横田甚五郎尹松相木市兵衛昌朝已下切て出岡
部ハ討死〳〵横田相木ハ切ぬけく甲府に落ぢり城落られバ
石川伯耆守数正城に入て政房を捜〳〵ぢく牢中に年久〳〵く
有て足痿れバむ〳〵ろのせて　東照宮の御前に出し多年
石に牢ふ〳〵難厄〳〵ぢ〳〵ぞとて御涙を流され御ふづう
ら刀脇差黄金をたく〳〵らふふ政房生ぞ〳〵れ〳〵事を口惜く

おそるゝ色あらざれバ人々敵のとりことなる事ハ小笠原が
不義なしく武田に降参せしゆへなれバ何方にのがれ出べきや
志ハ比類なき事なれバ生どりと成ぬるもなげくべきに
まてなりしかど口々にいひしかども甘んじて憤りしん剃髪し
て宵空と称せしが仰により尾張の津島の湯に浴し足の
痿も愈たれバ遠州稗原の地を賜りしが長久手の戦に討
死しけるとぞ

○天正三年勝頼奥平九八郎信昌が三州長篠の城をとりかこみ攻る
東照宮援兵を織田家にこはせ給ひ後巻の謀をめぐらし
給ふ処に城中粮米既に盡んとせしかバ此旨を告まゐらせん為に鳥
居強右衛門勝商に命じて密に城を出し鳥居のがれ出けるを

得バ向のかんぼうが嶺に烟をあぐべし三日過て又かの山に
烟を両度あげバ後巻なしと知るべし三度あげなバ後巻
ある事を知るべしと約しければ信昌鈴木金七郎を鳥居に添
て五月十四日の夜城の西なる山の岩根をつたひ川に入寄手
より大野川瀧川の水底に縄を張てなる子をかけたれバ
通るべきやうもなし二人水練の達者にて川の浅瀬ハよく
知りつ小脇指を抽て川底を潜り縄を切て通りしかバから
くも番の兵どもいまだ知ざりけり其中に一人五月雨
にはかなる川を鱸の遡るなんといひたれバさてやみぬ二
人ハ早瀬の下広瀬といふ処に上りてかんぼうが嶺にて烟をあ
げ十五日に岡崎に来てあらましの由を申す家に信長も日暮(?)

後に忘れ給ふ居ハ信昌尚心ゆかぬやいらんかのひ
得て城に入るを待バ早後詰ひべき事審ふやうとて引退き
鈴木ハ信昌が父美作守貞能小告げと鳥居忠吉をみち
かんかうぶ嶺に上り相図の煙三度あげて後篠原といふ所より
こ忍入たやとすれ柵重なりふりく砂をまき出入の人馬
足あと紙改めらハ市に入ぬき抜ちて出ひるを穴山梅
雪の者ども付てけやうして遠くからめられるわ勝頼道遥軒信
綱に雪の曲をなれ事の曲をなれ事へ呼ばハ
徳川殿を呼て汝がいのち城際に住て伝
長ハ上方の軍にて此城の後詰ひもよりずといとて城兵降
参ぶ市バ汝に厚く賞をんといとれ市バ居則心は

いとて城門近くより後詰として信長父子岡崎まで来れ
旗を出さるを先陣ハ一の宮に陣せり徳川殿伴父子阿田まく
詰るを出れより此城運命開ん事掌の内にといひれば
甲州の者ども大に怒ら居をひき連て勝頼にかくゝ
大に怒て城に向て磔にしてこゝろまきに長篠まで徳川
敗北して後信長を始め鳥居が無双の忠義を褒ず
作手に耳泉寺に懇に葬ゝまりける

○勝頼長篠の城を囲攻るの事

照宮と共に後巻にて軍評定の時酒井忠次すゝみ出今の
ゝ紀さより長篠の附城鴟巣へおしよせ攻破らバ猶敵必敗
北とぐゝとも申べぬと伝長あざ笑ひ汝ハ三河遠江の小ぜり

合ふハ慣つまで大軍の計策ハもゝざりなりと呼らまゝうハ
忠次いつぐさ初りて出る事又信長　東照宮ゝ防ゝ申
きれるハ左之肩ゞ中に処充然るべゝ又呼出さまゝとして酒井ゞ
側近く居りゝ諫ゝ申ゝ計ゝ裁さ仏も外ゝ泄やえん
うとゝてゝぐといつゝりて紙ゝりさやく池向て鴟巣を攻破
ゆへといえれゝりバ忠次承りて出んとす射又ひさぐめ同ぐく
ハ信長ゞ向ひ度ゝりあゝ武功を汝ゝ譲ゝ紀とやされる
忠次大ゝいさゝて夜半計ゝゝひもゝゝぬゝりゝせて武田兵
庫頭信実三枝勘解由和田兵部を始とゝあゝ討ゝり
火をかゝる煙を武田の軍兵顧て大ゝ勇氣抽て終ゝ敗北
北りゝりゝとなり此夜討ゝ天野惣次郎ハ指物を佐

さゞ戸田半平ハ逆とゝ夜あゝる事もけんとて指物を持ヤ
るゞ城を焼ゝる火のひゝり白日れぬく天野戸田先を爭ひる
ゝ戸田ゞ銀の髑髏ろさゝ和かゝやさゝりゝくゝ人の目を驚
ゝり信長後ゝ酒井ゞ功を賞ゝて汝ハ前ゝ眼有のゝゝも紀ゞ
なゝも眼ゝりゝとゝいえれゝりバ忠次忘ゝ中ゝ終ゝ後をゝる
るゝハゝりゝとやれバ信長笑て安堵の計たゞハゝる事を
賞せんゝていひるゝりとゝいゝるゝれバ忠次甘ゝ仰の名面目ゝ
ゝて退出ゝゝりゝ

○長篠ゝて信長の先陣と旗本との間ふゝり切をかゝ柵の木ゝひ
ゝ敷て敗北ナれバ武田の猛兵敵ハふゞゝゝゝゝ進来り柵ゝ木
ふ行ゝりゝゝゝゝを数千の鉄炮面ゝふゞゝゝうちかゝれバ

空矢なく中りて討るゝ者数をしらず引退んとすれバ柵より又
出て付つゝ戦をいどめバ柵の中に入てうちちらしけれバ勝頼の士
大将勇氣銳りたつといへども打破るべき様なく皆的になりて討
死しけり

○同じ時徳川家の先陣を下知せんとて信長の使来る内藤四郎
左衛門これ等が主君に先陣の下知を他人よりうくる者にハあら
ずと内藤承て君に仕へられしやはれよといらへていひて
追かへしに信長聞て徳川家より士数をつかはしといへどもりて
内藤を鳥井に附まはしたり然れども鳥井ハ三形が原にて
討死しけれバ内藤の事なかりし

○同じ軍に甲斐の士一人生どりて信長の前にひき来る躶に緋縅
子の付たる帯をしめたり信長名を問ふに美濃の者多田久蔵と
名乗る信長手を拍て汝ハ伯父の葬礼の時火車を斬たりと
聞つく美濃尾張とられにたりしみる國をまで我に奉公せよ
とやさしく縛りたる縄をときたまハせ悪源太もかゝるためしありと弓
箭とる身の恥なりとていひけれバ長谷川藤五郎かたへに
ひきのけ縄をとけバ多田こゝをかけ鎗を奪とり四五人つ
き伏る長谷川そこにて首を切て信長に出しけれバ
いとど信長深く惜まれけり

一説赤地の唐おりの錦の下帯しめたる士を生どり来る唯
者に非じ名のれといへども名のらざれバ雑人のてに
かけて殺さん士ならバ腹切せんといひしかば多田淡路が

子なりとて信長ゆて淡路と久義新義とて二人ハ
子なりとて問ふ小新藏なりとも勇士
ちなきすけてとて有れバ生ゆとなふ恥辱と
首を刎らるべしと乞ふ信長ハ笑て縄をとり
門外と立りけるを捨をとりたりの者なつを殺そと
ようく遂と新義を切ろ〳〵
○長篠合戦の前信長謀をめぐらし佐久間信盛より潛と長
坂釣閑ぐりと使を遣し日比信長小恨る子細ハ新義
勝頼軍をすゝめ戦ひんと其時信盛裏切して信長ハ
旗本へ俄と切かゝるを知旨をいひ送るらバ釣閑悦ぐ
こゝをきづうとハちゝぐ勝頼と一戦をすゝめる流馬場

美濃信勝を始とゝ侍大将ハ軍評定〳〵いひる事
ハを勝れ悉く用ひずして楯なゝと誓て進で軍すべきと決
断せゝまゝバ其後ハ諸大将詩ゝを滑ばりなるあり
○天正三年六月　東照宮二股の城を攻ふ城主ハ依田下野守
幸成なり其子右衛門大夫幸致城を出て鳥羽山の下ある小
川を隔て防戦ふ内藤弥次右衛家長強弓れなるゝ
其〳〵射ゝふ松平弥右衛忠長ゞ子彦九郎敵と朱乃
てゝちんれさゝ抜ひをんて味方ゝも叉さゝ拙有れバあや
まりて敵の中へまぎれ入しを能比奈弥兵衛一矢少て射伏さ
と内藤ハ長九郎と縁者のゝを引返して弥兵衛
狙射ゝ其後弥兵衛ゞ乗ゝる馬の鞍れ前輪ゝりて稲を

かけて射貫く弥兵衛が弟弥藏と七来て兄が屍をひき退んとすゝを二の矢ゆく是も射倒し〳〵城兵二人は屍をひきのけんとすゝを本多忠勝等進みかゝりて追ひ〳〵て城兵引退く中に一人手負てひき〳〵る者あるを一人こゝろ〳〵を出さすけ門内ふ引入るゝを櫻井莊之介勝次敵の首を一ツ取さゝ〳〵ぶ又すんで追ひ行　東照宮御覽せられ茜の四半の内〳〵和ハ櫻井ゝ〳〵保入すゝと仰られ是甚敵の手負を取〳〵者やゝ〳〵一の木戸揚錠門乃中に入る者ハいまゞ半兄弟〳〵を猪次走をつき手負〳〵る者ハ足をゆゝ〳〵三間計ひきさ〳〵遂ふ其首をゝる其時門内より勝次がさ〳〵和を折るゝ屍をかゝりゝゝとゝ〳〵

五六間計引とゝる時後者かくといへど又取てゝ〳〵和ハ
とゝ切て多羽山に攻ゝ首をとゝる　東照宮唯今の勇氣
れいゝゝと誠に毎双と覺ゆるなり然まても元より後ハ
ゆめ〳〵今日はゝ〳〵深ゝ〳〵紀を〳〵〳〵でとて遠州ゆて
禄を増〳〵是ゝはゝ〳〵彼後者も度々ゝ〳〵紀を〳〵て後
士とゝ〳〵内田彦右衛門といひゝり

○勝頼長篠敗北の後芦田常陸介信蕃二股の城をゝる三河
の軍五月下旬より此を攻る南方山に　東照宮御陣をゝる
られ巽の方鳥羽山東を安倉口の山北ハ三千原口は山西を
和田島に向城をかまへゝる信蕃固く守て十二月小ゝりて
城をゝ〳〵甲州に引入ゝ〳〵勝頼再三下知せゝれども聞

入ざ勝頼自筆ゟ書をもて下知せられしゝバ十二月下旬ゟ人質を出し廿三日ゟ城を渡さんと約せしが雨ふりゐれバ蓑笠ゟて丸若くれとて翌廿六日天晴ゝ渡城をゟ〻二股の川ゟ渡て人質をとりかへ引とまり信蕃小勢ゟて久しくゐり且城をゟ〻ゐん作法ぶしりゐるを沛然ありて後終ふ徳川家ゟ仕へゐり

○天正三年信長美濃岩村の城を攻て秋山伯耆晴近を生どり生ながら逆ざり付とゝ扨ゝ此ハ信長の姑遠山内藏助が妻ゟて遠山ハ甘ゟ岩村ゟゐゐを秋山遠山ゐ七家と称せし人ゝと和平ゝて岩ゐり元亀二年信長れ勢の十三十五騎を殺害し城を奪ゐて内藏助が後室を已が妻ゟゐゐ遠山ハゟより若ゐ病死し其嗣信長の男沛坊丸を甲州へ送ゟやり岩村を居城とせしが信長怒ゐくゐゐ事沛ゝくかゝハせられしゐり秋山口をくもたゐれゐるゐみゟハ信長ゝ縁類のゐゐゝこゐゟかくせゐゐ事無念ゐり

ゟて歯をかゝ信長れ末をゟんゟと罵て七八日ざゐゐて死しゐり信長信州法華寺ゟく兵粮ゐハゐる時いゐゐの小袖をゐゐゐ女房一人ゟり懐より錦の袋ゟ入ゐる茶入をゐり出し是を信長ゟゟんせ出ゟれへゟんゐゐくおゐしゐけんといゝ信長是ゟ出て茶入をハ石ゟ当てゐゐち砕き刀を抽てかの女房を切ゟ殺されゐり此秋山が妻ゟて信長れをばなり

○天正三年八月　東照宮諏訪原の城を攻ゐ此城ハ甲州

馬場美濃守氏勝が城制の法にてこしらへたまへりし名高き
城なりといへども城兵力弱りて廿四日の夜城を棄て小山の
城に逃落たまへり　東照宮此地ハ高天神に往来の要路
駿州田中持舩の敵と大井川一筋を隔たまへり勝利必隙を伺
ふ所なれバ誰か此に在て城をまもり敵を防ぐべきよし仰有け
るに松平左近忠次すゝみ出身不肖なりといへども此城をまもり
申べしと申ければ御感ありて松平乃姓を賜りけり御諱の字
を下され松平周防守康親と申せしも此時よりの事なり
勝頼が暴悪殷の紂王に似たりければ攻入て手あらば
まゝとよく諏訪の原の城を牧野乃城と改められしと
なり

○諏訪の原の城を甲州より攻来たまひて合戦あり松平康重康親の子
の士山内治大夫進士清三郎山崎惣左衛門三人殿しけるに山
内ハ精兵の事なれバ射拂て引退く時矢当りて山縣
源四郎継進がりける時進士清三郎矢一筋を山内になげやり
しかバ山内ふと止まりて射ければ志村金左衛門が胸板を射通し
後の松の木に射たりけるそれより物いくさはじまれば山縣此矢
を康重に送まゐらして強弓精兵無雙なりとぞほめたり
ければ康重其矢に進士が姓名の彫付ありしを見て賞せる処
に是ハ山内が射申したるにてはとて復山内を呼出しつく
づく見ありやと問たるに清三郎が射たるにてはあれどもゆづりける也
康重両人に感状をあたへたり世の人此人を今の孟之反也

いひあるり

○天正五年畠山修理大夫義隆毒殺せ〳〵ま家臣七尾の城に據て信長小屬〳〵能登大に乱まれば義隆乃伯父上杉弥五郎義春越後に在く是を聞謙信にかく〳〵告謙信即師を出〳〵義春先陣〳〵て七尾乃城を攻おとす此時長九郎左衛門重連七尾にて畠山が長臣温井三宅に殺さる重連が弟恩光寺使僧となりて信長に此由をヤせバ柴田勝家丹羽長秀長谷川　前田利家羽柴秀吉滝川一益氏家卜全等四万計にて去八月五日加州手とり川を渉て永鳴に陣取り謙信ハ能登一州悉く旗下につき八月朔日兵を引〳〵加州に長が一族の首七ツ倉部柳瀬の間なる濱小竿に掛並べ札を書て立られ其松任の城主蕪木右兵衛大夫と和平し信長着陣を待、松任に〳〵軍評定し一戦をべしとまくるあり七尾既に落て謙信ハ打向まとり爰にて合戦無益なりとく引退くべしと信長此陣々いろめき立恩光寺人〳〵首を見すまく名のこふく面顔異なり上方の軍おい来るを多謀を以て長一族の首をいつもり設こなるこん能州をすて松任に在ハ怪詰防ん為なるべしいとをすてさわぐもこれまりなり即夜戌の刻に及て恩光寺柴田木下が陣に行先に八味方一同に敗北せるをいろをなて生ぐりてヤせ〳〵をを七つの首ハ吾父兄弟にてれと告ち〳〵せ〳〵ハ爰にて合戦せ

へゝばとて信長引かへさゝる恩光寺是非一軍と乞へども学
入ず恩光寺ハ後信長の命ゝて還俗し長九郎左まつ連龍と
いひしハ此人形を連龍父兄の吊合戦を志し信長ハ下知を
待越前ゝ赴て柴田ゝ出ものゝ多を偖永越前の大橋ゝ
札を立長九郎左衛門能州ゝ發向ゝて立身を志ゝて輩ハ皆ぶ
被官ゝなりとも条ゝ書ゝなれバ相あつまる士八十餘
人天正七年三月二日能州究水の城ゝ入旧好の者ゝ池ゝつ
ゝ百人ゝ及べり上杉ゝ有坂備中を七尾ゝおくるゝ
長曽検見与十郎を大将ゝ成ゝて敵ゝ長敗北し
て危ゝ成ゝを谷大学討死し長やゝ引ゝ成ゝ紀
州士鈴木因幡初長ゝ成ゝ北越ゝ居て今能州ゝ来

る長有坂を和平し従者ハ陸長ハ舩ゝ有坂ゝ方ゝ来ル
成ゝの使ゝ鈴木ゝ成ゝ長を殺害ゝ成ゝ色あり長ゝ従
へる石黒大膳井久留内意合田民部木村小外内の成ゝ
いゝ石黒今七尾ゝゆゝバ必害ゝ成ゝ舩中ゝて鈴木を殺して
退ゝ成ゝとすゝむ長冥て汝ゝ志悦ゝ成ゝ拙ゝ陸ゝ田
る家人皆殺ゝ成ゝ吾獨生べき義なゝて七尾ゝ出紀法
道寺ゝ入ゝ遂ゝ有坂ゝ對面ゝて殺害ゝ成ゝ有
坂事故ゝ成ゝ長を帰しゝ成ゝ松川兵部今ゝ長を討ゝ成ゝし
残多くゝおゝゝて討ゝ成ゝ有坂内入ゝて長ハ石動山ゝ
かゝて越中小赴ゝ石黒敵ゝ成ゝ来らんゝ成ゝる者なゝバ口惜
ゝ成ゝ姓名を書ゝ成ゝ敵を支て討死せんゝ成ゝ長汝

をすて殺し吾獨生て何の面目あらんと云石黒いひけるは
事をゆるものゝ命を遂られゝば吾子孫をそゝりゝて生
まれと云ゝ七尾の商来て敵打ゝとゝ長ハ石動
山ゝかゝり石黒ハ物ゝ具して待ども敵来らざれバ引ゝより
乗付ゝ共ゝ越中ゝ赴き神保安藝守氏春のゝふ居り
後長ハ前田の家ゝ仕へゝ浅井なゝゝ武功ゝ有ゝを此人
なり長ハ又恕庵と称しゝり

○謙信越中ゝて秋夜詠ゝをあつめ月を賞して詩ゝり

露滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山並得能州景。
任他家鄕念遠征

○東照宮信長小作對面の時松永彈正久秀かゝゝゝ伝ゝ

此老翁ハ世人のなゝゝゝゝ者ゝり將軍を弑
し奉ゝ又已ゝ主君の三好を殺し南都ゝ大佛殿を焚ゝ
松永と申ス者なりと申されゝゝ松永汗をちゝして赤面せり
東照宮後長臣等を召て作物語ゝゝゝ時此事を仰出
ゝれ先年信長金崎を引退ゝ時所ゝゝ一揆起ゝ危ゝし
小朽木ゝ浅井と一味を整ひ進退きハまりしに松永伝ゝ
ゝ告て朽木ゝ方へ参りて味方ゝ引付ゝ朽木同心せば
人ゝを出ゝゝ歩具ゝ作迎ゝ参ゝ若又帰ゝゝ
らずバ事なゝゝして朽木と刺ちゝゝゝ死ゝゝゝ
しめられよといひく朽木ゝ館ゝ赴き事なく人ゝを
出さゝそゝゝゝ信長朽木谷ゝかゝりて引かゝゝゝ

と仰らまつりとぞ

○松永ゞ士大将山口六郎四郎奥田三河ち高屋の城を守るゝを
信長攻らるゝ城中力尽く一方をかけ破り落んとせゝ
山口風雨の夜鉄炮をあつゝ東の門此寄手へ向て攻ふう
ゝせるきばをはや打て出ゝとさわぎゝ其ひゝ西の門を
開き一図にかけ出撃破りて落ゆきぬ

○謙信卒して 天正六年三月九日 養子上杉三郎景虎 改政虎実ハ北条氏康の子ゝ 猶子喜平
治景勝遺跡を争ふ景虎縁あるゝ武田勝頼に援兵を乞
む猶軍兵を出し此時景勝謀て猶軍の寵臣長坂釣閑跡部
大炊助に使者を送り勝頼小黄八金一万両竜臣小二千両宛を
與へゝ加勢をこふ両寵臣猶軍を勧て政虎を放されぬ

是より諸士勝頼をうゝみるゞ終小勝頼の妹聟木曽左
馬頭儀昌信長に従て勝頼に叛く猶軍これを討んとゝく
軍を信州諏訪原に陣をとる小山田左兵衛信茂もさきに
従て汴宿監物友綱に送る

汴馬忽々丘草辰。東西戦敲轟邉恨。世乱逆依何起。
只是黄八金五百鈞。
砂金を一朱もゝぬるゝ辱をかく数ふ今うゝ
友綱和韻
甲越和親堅約辰。黄八金媒嫁訟神恨。信臣屠盡平安國。
可惜家名換万鈞。
辱恥をかくゝはものゝはゝて世乃寂滅をゝも金の渚ゝ

両寵臣弥邪義を以て武田家滅亡せり

○天正七年九月　東照宮勝頼と大井川のほとりにて川を隔て対陣しおはしける時に大木川上よく川にむすび流しける其音波にひゞきておどろ／＼しく聞えしかバすハや勝頼夜討に寄るとさはぎたちてとりあへず牧野半右衛門に先陣をしづめよと仰せ遣はされしかバ牧野馳行ていづくもさわぎはや御旗本もさわぎたれバとくしづまりけれと呼はりければ愈さわぎけれバちからかけるところに大久保七郎右衛門忠世馳来り勝頼打出したりとて御旗本ハ物の具つけて敵を待かけたるに何とて先陣の人々かくまで騒ぎ立けるぞと後日に嘲けるべしとてしづまりけれへと罵りければ是に恥ぢあへれて程なくさわぎもしづまりけるとぞ

一説持船の城を攻おとさせたまひ保ちがたくして焼すてらるゝ此時勝頼沼津の城普請はじめの上にて此畑をまいらせ北条家の軍を後にして九月廿日　東照宮の御陣に打向ひ冨士川をわたられ　東照宮文客戦ハ危しとや御思慮ありて兵をかくして大井川の伊呂をこえさせたまふべきに定させおはしまして俄に惣軍さわぎたちてしづまらず牧野半右衛門制し止めて弥さわぎしに七郎右衛門忠世御旗本に大挑燈をたかくさしあげさせ士をつけおさへてしづまるまで動くべからずといひふくめ先陣に行て御旗本ハ二の身を討んとてしづまりけり

其證ハ所の火ぬ動ぬをみよといひれバ是ようてもぐ
まりまバやぐてめりゆう先陣ハよくもぐまりて敵を待
仕ちり後先陣の人々ハ見ふぐとといひれバそれも
まもまぐまりまもといへ

○東照宮高天神の城をかこませ給ひ柵を付て固くもまる彷
らる城中後詰を乞ども勝頼出ず糧盡り栗田刑部使を
もく幸若ガ舞を一曲所望是を今生のゐひ出よせんとや
まる城 東照宮家ー召やはーもいひるよとて幸若小
高館を舞せまる栗田ガ最愛の小性時田鶴千世といひし
者ニ結紙やうの物をもたせ出ーて幸若小贈とあるを世ハ
落城乃時時田討死ーるを首をやりられども女の首ぬ

ぬーと人ー疑へり 東照宮家ー召まき眼をひらきたよ女
なるバ白眼ぬるぬーと仰有れバひらいてんふ黒眼あ
ると又幸若忠四郎も高館を舞ぬる時ハまもまるまバ
時田ガ首ニ定まるり

○天正八年七月 東照宮田中の城を攻させひ八幡山ニ陣
陣ぬるぬ苅田ぬるぬるれ行ぬ猪狩怪ぬ出せんとて甲州をお
出る松平康親ガ士岡田竹右衛門元次此ごろ夕立洪水ぬべ
き時ぬり大井川ハ一夜ニ水出ぬ渉ぬぬーー勝頼血氣の
勇将少てんへバ馬ニ係ニ押よせ来ぬるん苅田終らバぬく
川を渉て吾城かくされ給ぬーとやハ 東照宮左ぬ
ぬるし川を渉ニ兵をもをあまし果ーて其夜大雨ぬげ

〻く大井川水出きり

○田中の城を攻らるゝ時西郷伊豫とゝ剛の者足軽を引具し
度々打て出寄手を破るゝまゝバ　東照宮誰ゝつる西郷を
うつゞを知者ハと仰有れども答る人なし　其夜菅沼大膳
ゞ陳小人〻あつまりく此事をいひ出しこゝゝ菅沼ゞ小性彩
日千代後ニハ丹後と号ス　十八歳なりしゞすゝみ出討とゝべしといふ菱
沼聞て汝寝言をいつやといひしゝ必定討取申さんとゝゞ
はばりれ古兵も軍ゝるゝつる西々ゝり出やらく討人手
ゝひもよゝゞそこ立されと罵るゝバかゝるゝりいやとよ
千代ゞはゝ出ひなゝみくゝゝゝゝ未熟母しれわる者か
るといひなゞゝゝり千代あゝを待ゝゝ西々ゞ首挽て

糸〻んはをゝ獨言〻〻く退るゝりかゝて夜深て菅沼ゞ出
せ〻鉄炮をゝう出〻暁陳屋をひそうに出岡部と藤枝の間
なる竹林ゝかゝゝ居ゝり夜あゝく西郷馬ゝ乗足軽引具
して来る　東照宮ハ岡部の小山ゝ陣ゝしておいせゞ
敵又出ゝると仰ゝゝゝゝゝ千代鉄炮ゝるあすゝ西々を
馬ゝり打落〻ゝ走る出く首をゆりかけ引てかゝゝに
東照宮ゝられ剛の者よとおもせゝゝバ是ゝり千代ゞ名
高く冥ゝゝり

○天正二年勝頼兵を出して菅沼新八郎定盈ゞ新ゝかゝへゝ
る城を攻んとゝゝ定盈ゞ一族をゝ導とゝく不意ゝ〻ゝすゝ
謀をゝり出る者ゝて告ゝゝ〻せゝり■月九日の曙ゝ定盈

ゞ士ども大敵和田嶺本宮坂二筋よりとられて攻来れば早く退
きてとゝを聞て一軍もせゞ逃落ん事弓矢の者の恥か
ゝる人々永禄年中今川家より攻し時ハ西尾孫九郎元
正加勢ゝりて今多ゝぬ士卒打ちゝきバよく城を出く
運をひらくのさゝて然るをゝらんとゝへども定盈兵を出し
て敵の旗とゝせし山縣ゞ軍競来る由告るゝ定盈則ち
ゆたくうゝひをうゝて出バ足軽の頭山口五郎作ちひて誅
ゝきバ則ち出手を洗ゝるゞ又湯をゆて口をすゝぐ仕
常のごゝしちひく諫きバ南ハ郭ゝを退きゝるゞ途中ゝ
てゝゝき等ゞ伏所ゝ火をかけざる事後ゝ敵ゝ嘲らゝべし
誰ゝハ帰ゝて城ゝ火をかけゝ又日比愛したる鷹を携ゝ来る

ゝをとゝひもゝぬゝ中山興六十八歳なるゞ引ゝ城ゝも
どり火をかけ鷹を臂ふて出ゝりゝ定盈ハ宇利を経て
西郷へ赴ゝるゝ城ちひく与六海倉洞まで退きるゞ
興六ゞ一族後殿金助追ゝけ来てきゝれゝも敵ゝ後を見
ゝるゝ刎をかけゝるゝバ興六馬ひきゝゝむゝと組
て既ゝ金助ゞ首をとゝんとせしゝ多嶺の士あゝちゝさ
なりて駆ゝ討ゝりゝ山口ハ定盈ゞ後殿して主従三騎素
綯瀬を渉るゝふ敵追来る山口引返して敵にゝゝ射伏さ
まゝゝ馬疲ゝれバ敵ハ近く鍬田村ゝかゝり吉祥山ゝ赴
く敵ゝ追ゝけ来ゝバ茂ゝふ射ちゝるゞ馬動ざり
ゝゝ乗ちゝて歩ちゝなり山ゝかゝる箭二筋ゝを

残まり菅沼刑部塩津傳助追つめられバ射られども中らず
指添を抽て手裏剣ようつ刑部が頭上をうちかすり岩に
山口も終にそこにて討死し其墓今に有之とかや

○岡崎三郎君天正七年二股の城にて自殺おはしまさるるに
信長より叛逆の志有て勝頼に内通し二股の城へ甲斐
乃兵を引入るをきとの三郎謀ありと此事ハ酒井左衛門尉に
く存知らると告やされしより事起りて遂に死を賜ハ
るぬ

忠次を信長召寄て三郎君ハ北の方より告やされし
十二条の悪事をあげて忠次に問まつふ忠次是より前
三郎君の侍女おぬうといひし美人をひそかに已が妾とせ
しに事ありて三郎君憤怒ありられバ陳謝のために及ぶ
とかや

又一説に佐久間右衛門尉信盛三河に参りて東照
宮御馳走ありるゲ三郎君をめされ御膳面にて佐久
間黄ばむ綿おびしをかぶり居さるを三郎君ひさ奪ひ
てなげ棄無礼ありと怒らせ給ふ　東照宮怒給
ふ三郎君ハ信長の聟なれとて仰せらるる
しらバ佐久間無礼を謝ーやせーが是も信長こへ讒言せ
故ともいへ三郎君ハ勇氣豪くやーくきハめて抱あら
くおちーちく軍に陪て氣色かハり髪毛も逆さら
ばくばくを　東照宮御覧して摩利志天の像に

似〻ようと仰有しなぞ
平岩七之助親吉ハ三郎君の傅なりしゆへ臣ゞ諫申さゞる罪
を以て死刑に行まし首を信長に献ふ三郎君をゝ獄ふ
れて時を待居あれと申々ゝを　東照宮汝ゞ忠心ハ誠に以
べき剛も非まてもよく奈せ武勇わまてまされりと思ふ
子を殺さハ忍ざるの心なり汝ゞ首を信長に献ふるも既に
吾家の長臣酒井ゞ信長にあくまでけうくいひつゝと覚れ
ぞなりく冥入らまで汝を殺さハ恥の上に恥損の上に損と
是なるべしと仰られゝで其後年経て忠次目を煩ひて
久しくこもりたりしゞ御前に出て年老ぬ子を不便
せゝ給ふとの事を召信康生て有ゝばかぞりゝ心
を労さゝきゝよ汝も子の不便ある事を思ふゝゞ怪し記と
仰らましゝバ言なくて退出ゝたりゝ又ある時幸若大夫ゞ
満仲を舞ゝりゝを御覧ゆゝて満仲の舞ハ大久保ハ忠ゝきゞ
いと仰られしゝバ忠世も引こりりゝをこれハ三郎君を忠世ゝ
御あづけゝりゝふ定て引且ハ三郎君の御
をひそめなんと思ゝふさハなりゝ有三郎君の御
事ハ悔ませゝ給ふ事ゝ御詞に出ざれども事ゝふまし殺
年の後ゝ愁傷の色あらられさせゝひゝゝ
○摂州花隈の城ハ荒木摂津守村重ゞ一族荒木志摩守元清
ゝゝれと天正八年信長の命にて付城をかまへ花隈の北諏
訪ゞ嶺に八護國公西の方金剛寺山に八士大将伊木清兵衛

忠次森寺清右衛門忠徳南の方生田の森よハ護國公の嫡子勝九郎之助ちうもひぬいづまる花限ちう六七町計を隔ちう三月二日城より兵を出し勝九郎廿二歳にて組討の功名あり國清公（此時古新しやに投小三左衛門尉輝政公）十六歳にておハせしゆゑ組討ゆく首をとるとハ護國公敵五六人自討ちう伊木清兵衛秋田志摩堀与左衛門芳賀五郎右衛門石黒武左衛門佐橋武右衛門後藤市兵衛波多野弥藏等こゝ〳〵戦ひく追崩にする夜護國公森寺政右衛門を呼で城中へ忍入よくゝ考まと命ぜ〳〵森寺ハ時梶浦勘兵衛も打つまんとに森寺今夜の物見ハ大事ちう相俱んす叶べうゝとゆ梶浦ゆてとひ立ちる事ゆ〳〵く帰るべきや自害をちう外なりとゆく

帰るべき体にうゝぶれバうちつまちう陳と城との間に小さき坂あり城中ちう武者二人鎗を提げ来るゆ出あひ二人とも討ちう首をバ草の中に匿し搦手の水道ちう忍ひ入又ゆきちう出て匿し置ちる首を持帰実検に入城中のみさゝを中せハ護國公ちや城ハ攻ちうゝちするよいふしてちハ此功を賞をべき但梶浦ハ行てハきゝやと問ちふ梶浦兼ちて改を置て仰られしを物うげゆて守りてとやに護國公近習の人をのけていひつる事を立聞し且軍法を破ちるとゆ怒ちうゝ其時森寺只今黍を仰られ居てゆ〳〵の居ハバ勘兵衛が処をゆきをせうひいへうゝとやせバ護國公さてやゝなんとて仰るかくて七月二日に及で生田の森北

南へ馬の茅苅ゑ雑人出るを城中より兵を伏置て追ちら
しゝを生田の森れ付城より見を見て彷九郎馬上ゑ徐
を横ゑ入たゞけ者共として地向ゑ梶浦兵七河清忠三郎大
陽寺左平次旧田吉左ゑ日置清十郎ゑど追つゞき声を石
げて切ゑゝる竹村喜左ゑつ乾平右ゑつ長谷川彩ゑ郎鎗を
き拭射る涙本弥兵衛ハ四寸角の柱れ一丈飛ゑるを打ふ
ゑて敵をたゝき代相戦ゑ金剛寺山の伊木森寺も大ゑの
軍をげ〳〵れを見て搦手より乗ゑんとすゑ城より
野口与一兵衛といゑる者半町ばゑ打て出防ゑゑ堅口も討
死すれバ城ぎハへおつゑる大手の戦ゑ苦ゑ多く討ゑ危か
ゑれバ引ゑんと護國公梶浦ゑ向をかけられバ勧ゑ
唯今あゞんゑせば弥ゑゞれ行ゑ然ゞ〳〵ゑ鉄炮の
数少く覚つゑに俄ゑ〳〵ゑハ搦ゑより大ゑへ救来めゑん
政右ゑつゑ加〳〵め手へおつゑ乗ゑみゑゞ〳〵ゑゑ只今大
手の味方を引ゑゑバ敵搦手へ来て政右ゑつ討死せゞ〳〵
ゑゑ護國公左ゑりゑくゆきて見来まて仰られゑハ
勘兵衛弛つけて右ゑ〳〵れるなゑゑゑ政右ゑつゑくゑゑ
ゑゑゑ入ゞ〳〵大手を攻られゑゑゑゑ勘兵衛此場
を見すて〳〵ゆゑんハ口を〳〵ゑれども使の仰重ゑれハゑてかけ
帰ゑゑ〳〵ゑセハ護國公毎三毎三ゑ乗破まゑて下知せゑゑ
勘兵衛ハ城兵乃必突て出ゞゑ門脇ゑ出ゞんゑせゑゑ搦ゑ
ゑゑも伊木森ち先をゑゑゑゑゑゑゑ門を破ゑて攻入ゑゑ森

寺ハたゝ〻の春案内ハよく見とゝ〻ゝ門を破る透間をかゝ
の屏を踰敵後ゝて突れども飛こみて其まゝ討とりさゝり
梶浦ゞ森ゝ〻めくかゝ〻めてゝ防ぐ兵少りゝまゝバ攻入く
火をかけゝり城兵も大なの門をおゝひ〻紀切て出る勘兵衛
待受て鎗を合ゝ城兵髮を切ぬけんと死狂ゝ成て戦ひるゝ
寄ゝかゝめてより攻入ゝるゞ敵の後へ切てかゝりゝらバ城兵後
ゝ〻ゝ出ゝて敗北せり兵庫の築瀆ゝ雑賀孫一郎花隈の加
勢ゝゝくみゝゝを伊木森寺先陣ゝておゝよせ攻落ゝ此
時湊川ゝて勝九郎五輪作右衛門ゝゝ剛の者と鎗を合ゝ森
寺改右衛門も能付られバ作右衛門ゝゝ引ゝて退きゝゝゞ五輪のゝ
物を見ハかれゝゝ見ゝゝ弱なり両人へまゝゝすゝゝゝ

て川へ飛こみて遁まゝ浮ゝり黠紀四郎ゝ白き五輪の形を染さ
るなりゝと形り信長ゝゝ猪九郎國清公小馬ゝゝ目前ゝて各功名ゝたるかれバ
明ゝ見届ゝ中ゝ能て梶浦ゞ決ゝ鎗を合せゝゝるゝよりも忙ゝ
き場ゝよくゝこゝゝ察ゝゝれとくかゝゝ賞美有りるゝゞ

○天正十年勝頼の第仁科五郎信盛高遠の城をもゝ織田信
忠僧を使ゝゝて勝頼の滅んず近きゝゝりとく城を出
らゝゞゝといひ送ゝゝりきゝバ信盛怒て返ゝも世で僧
乃耳鼻をそいで追出ゝ信忠ゝゝバ攻よゝておゝよ殺て
きびゝゝ攻ゝゝ城兵ゝゝゝゝきゞゝゝゝく討き信盛小山田備中
渡邊金大夫照春日河内ゝ原隼人今福安左衛門諏訪莊左

巳下十八人十二間ゟ七間の廣間ゟ火をちらして我ふ
信忠浅黄金襴のちらけて屏ゟあがり梧桐の枝ゟ
下知せ〻を目ゟかけ七八度打てか〻る此時三十五六歳計
れ女房の緋おどしの物ゝ具著眉尖刀を提げ諏訪弁右衛つが
妻なりと名乗り七八人ちゞ伏て自害〻〻ゟ信盛を始と
て死狂ひ切てまはれど攻あぐみ〻る時森武藏守長可屋根の
板引破らせ鉄炮を打こゝろゝまゝバ信盛床の上ゟ
腹切て腸をたゝんでか〻る紙ゟ擲ち倒まし死に其血痕後
までゝとゝゝゟ小山田巳下も自害〻〻ゟ信盛此時十九
象なり信忠のゝりたれ〻梧桐ゟ鎗刀のゝとひ〻と付
て大廣間の天井も柱も総太刀ゝとありて血ゟゝゝゟ
所なく庭ゟ残まる雪ゟ血かゝりて紫となるまでゝとぎ〻

常山紀談巻之四 終

四之三十終

早稲田大学図書館
011688998109